
もう一つの幻想世界

雨音ナギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一つの幻想世界

【Nコード】

N7807V

【作者名】

雨音ナギ

【あらすじ】

——まさか、こんなことになるなんて。

いつもと変わらない日常生活を送っていた高校生・三日月紫苑^{みかづきしおん}

だが、十八歳の誕生日が終わった真夜中に起きた出来事によって彼の運命は変わってしまう。
水の精霊神・リリアの力を借りながら死神を討伐していくが、その裏では衝撃的な事実が蠢いていた……。

能力系ファンタジー物語です。

第一話

ある部屋の一室で一人の女性は椅子に座り資料を読み進めていた。西洋のお伽話に出てきそうな長いローブを着こなし、ストレートに伸ばした薄く綺麗な青い髪と純白の肌がよく目立つ。

美人と言っても過言ではないが、華奢な体のせいでその表情は何処か幼く見える。

彼女が居る部屋は蔵書に囲まれ、図書館を彷彿させるが、周りに不自然に置いてある龍の置物のせいで異様な雰囲気を保っていた。

「死神、か」

机の上に置いてある資料を手に取り、書かれてある内容を目で追っていく。

彼女が言った『死神』とは此処最近、下界で賑わせている凶悪な人外者であり、彼女が今居る精霊界でも話題に上っていた。

通常的手段では倒せない特殊な存在な為、この世界でも日々問題になっているのだが、未だ解決には至ってない。

紙は何枚にも重なっており、彼女は必要な部分だけを抜き出して読み進めていった。

「死神を滅する者は四元素を操れるもの。それは、私達精霊神と下界のごくごく一部しか当てはまらない。だれど、この報告では通常とは違った例外な者が居ると」

四元素とは火・水・風・土の事で主に彼女の世界や彼女が言う下界では多く利用されている要素の事である。

そして、四元素を扱うものは精霊神以外は自分に合った特性の要素

しか操れない。

また、通常の魔術も毛色が違うため、扱うことも不可能とされている。

資料は既に手に入っているのか挟んである報告書と照らし合わせて読み進めていくと、彼女はとあるページで捲る手を止めた。

そのページにはある人物の顔写真が貼っており、ボサボサの黒髪をショートカットに整え上げて穏やかな表情でこちらを向いている。写真を見た彼女は何処か興味深そうにページを見続けた。

「へえ……私と同じ素質を持ったもの、か。これは直々に見に行くしかないわね」

彼女はそう呟いて持っていた資料を机の上に置くと直ぐに出かける準備を始める。

両手を軽く合わせて円を作ると、今まで置物から穏やかに流れていた湧き水が竜のように円を描き、扉が出来た。そして、出来た扉に手をかけて中にある道を進んでいった。

シンプルな家具が揃えられた部屋の一室。

比較的、歳の割りに清潔感を伴ったこの部屋で一人の少年がベットで眠っていた。

既に朝日は昇り、時刻は午前六時半前を示している。

時計の針が一つ動いた時。

けたたましい音量で彼の枕元にあった目覚まし時計は鳴り始めた。彼は布団から手だけを出して目覚まし時計のアラームを止める。

「う……ん」

朝に弱いのか中々起き上がろうとしない。

それどころか彼は目覚まし時計のアラームを止めて安心したのか再び眠りに落ちようとしていた時、彼の部屋のドアのノック音が響いた。

「紫苑！起きなさい！早く起きないと遅刻するわよ！」

声の主は少年の母親だろう。

彼女はドアノブを回して扉を開けると、ベッドの上で寝ていた少年を揺さぶり起こす。

揺さぶられた彼はやっと気づいたのか、眠そうに薄ら目を開いた。その姿をみた母親は呆れたようにため息をつく。

「全く……今年で高校生活最後って言うのに……。いつまでだらしない格好で居るの！ご飯の準備できてるから早く着替えて降りてきなさい」

出て行く母親に、はあい、と彼は生返事をする。暖かい色合いを醸し出しているクローゼットから自らの制服を引っ張り出した。

簡単に身支度を済ました後、机の上においてあった携帯と鞆を持ち、下へと降りていく。

彼の名前は三日月紫苑。みかつきしおん

この近辺にある一条高校の三年生である。

今日から新学期が始まる為、こうして学校へと向かう準備をしているのだが、いつものごとく準備は忙せわいしい。

下に降りた彼は、荷物を床に降ろして椅子に座り、机の上に並んでいる味噌汁とご飯と昨日残り物である餃子数個を食べ進めていった。

「紫苑、今日は何時ごろに帰れそう？」

彼の姿を横目に食器を洗いながらも話しかけてくる母親に対して、紫苑は答える。

「んー、そうだな……。始業式の日はいつも早いんだよな。確か四時間だったかな。昼前には終わると思うよ」

「分かったわ。それと、今日は紫苑の誕生日だから、ケーキ何がい……」

母親の言葉を待たずに彼はご飯を済ませて荷物を持ち、急いで玄関へと向かうが、まだ聞くことが残っているのか彼女も皿洗いの手を止めて、彼の後を追いかける。

「ちょっと待ちなさい！ケーキは何がいいの？」

ドアに手を掛けて扉を開こうとした彼を制止し、母親は再び聞き返した。

彼は急いでいる気持ちが強いのか少しうんざりしたように、彼女のほうへと振り向きかえる。

「ケーキはいつものでいいよ。チョコレートケーキね。んじゃ、行ってくる」

彼は急いだ口調でそう言くと直ぐにドアを開け、駐車場の裏手に置いてあった自転車を引っ張りだして跨る。

そして、逸る気持ちを抑えながらも一条高校へと自転車を乗り進めていった。

第二話

商店街、はたまた大通りを抜けて、最後の難関である坂道を登り切ると、その先に佇んでいる一条高校が見えてきた。

そのまま漕ぐスピードを落とさずに正門へ向かう際、学校内に設置してある時計をちらりと見やる。

——時刻は八時二十分。

遅刻ギリギリのタイミングで学校に着いたらしい。

時間が時間だからか登校者はおらず、皆、講堂へと集まっているようだった。

紫苑は乗っていた自転車を自転車専用置き場に置くと、すぐさま始業式が行われている講堂へと走っていく。

急いで講堂へ向かうと既に全校生徒が集まっていたが、幸いにもまだ始業式は行われていないらしく彼はその様子にホッと胸を撫で下ろした。

走ったせいなのか、少し息を切らしながらも、人の合間を抜けて、自らが所属しているクラスへと立ち並ぶ。

「やっぱり遅刻したか。紫苑」

紫苑が一息ついて列に並んだその時、隣の方から声が聞こえた。

幼馴染の宝生彰^{（ほせい しょう）}である。

彼とは幼稚園の頃からの親友であり、この学校の中では一番付き合いい人物だろう。

彰はカッターシャツの中に着込んだ色つきのシャツや首につけたシルバーアクセサリーやブレスネットが目立っており、一見、遊び人のように見えるが、実は遊び人は毛嫌いしており、困った人は放っ

ておけない優しい性格の持ち主であったりする。

人は見かけによらないという事はこういうことなんだろう、と紫苑は毎回会う幼馴染にそんな感想を持ちつつも、言われた事に若干顔をむくらませて反論した。

「やつぱりって何だよ……。そんな格好してるお前に言われたくねーよ。今回の風紀検査でそれ、取られるんじゃないのか？」

彼ののからかいに対して紫苑は少し皮肉った口調でそう言い返す。だが、当の本人は、アクセサリーは絶対に取られない自信があるから大丈夫だ、とあまり気にしていない。

「お前の自信はどっから来るんだよ……。その自信、俺にも分けて欲しいくらいだ」

紫苑はため息をついたと同時に、全校生徒のざわめきが静まり始めた。

前に視線を戻すと、校内に鳴り響くチャイムと同時に彼らの学校生活のスタート地点である一学期の始業式が始まったのだった。

「んー、やっと終わったなー」

彰は退屈だったのか軽く背伸びをして立ち上がった。

紫苑も彼と一緒に帰る為に荷物を纏めて立ち上がり、二人で教室を後にする。

始業式が終了後、彼らは新しいクラスの教室へと戻り、ホームルームで今学期に行う委員会の役員を決めたのち、すぐさま解散となった。

今年は例年より早く終わつたらしくまだ時刻は午前十一時前だ。部活に入っていない彼らは校内に居ても特に何もすることは無いので、直ぐに学校を出て街中にある商店街へと足を進めている。

「今年は意外にも早く終わつたな、紫苑」

「そうだな。今年は楽な担任で助かったよ」

「確かに俺らの担任つてめんどくさい事嫌つてそうだしなー。去年はやかましくて耐えられなかった」

今流行りのスマートフォンでメールをチェックしながら、彰はそう呟く。

彼が言ったことに紫苑は去年のクラス状況を思い出したのか、苦笑いの表情を浮かべる。

よほど酷かったのだろうか紫苑の表情は先ほどとは打って変わって少し引きつった表情に変わった。

「ああ、あの先生は神経質すぎたんだよ……。まあ、確かに今年は楽で良かったな、彰。それより今日はどうする？こんなに早く終わると思わなかったし……。どっか遊んで帰るか？」

彼の提案に、彰は歩きながら端末を操作するのをやめて、おっ、いいね、とこちらに振り向いた。

話を聞く限り、彼も今日の昼は暇を持て余していたらしい。

「今はまだ春だからいいが、夏になると皆受験勉強し始めるからなー。今のうちに遊んでおかないとな。じゃあ何処行く？昼前だし、先に飯食いに行くか」

「そうだね。……つとちよつと待ってくれ」

紫苑は一言言うと、何かを思い出したように鞆から携帯を取り出した。

黒い折りたたみの携帯を開き、目当てのアドレス帳を探し出して選ぶと彼は通話ボタンを押して電話を掛け始める。

相手に繋ぐために呼び出し音が数回コールされた後、一人の女性が電話口に出た。

「もしもし？母さん？今、彰と一緒に居るよ。で、ご飯一緒に食べて帰るから作らなくていいよ。わかってるって、夕方までには帰るって。んじゃ」

そう言つて彼は携帯のボタンを押して通話を終了させた。

その姿をみた彰は、お前つて母親思いなんだな、と言つたのを紫苑は聞き逃さなかった。

「ん？そうか？彰とこの母さん優しいじゃないか。俺にとっては理想の母親像だよ。美人だし」

「お前、人んちの事情知らないからそんなこと言えるんだろうよ……。俺の母親はお前の理想とは正反対なんだぜ。まあ、お互い母親には頭が上がらないって事だよな」

彼に屈託の笑顔を見せつけながらも彰は足を進めていく。

そして、彼らは商店街の中にある店を一軒一軒見比べていくと、ある一軒の中華料理屋の前で足を止めた。

店の前にあるマジックで書かれた何処か懐かしい手書きのメニュー表を見て、道端に立っていた紫苑を呼び寄せる。

「特製ランチ三百五十円だつてよ。此処にしないか？メニューは好きな料理三品＋ライス＋卵スープって書いてあるし。得じゃね？」

「そうだな……そういえばこの店の中華料理屋ってまだ食べたこと無いんだよな。四百円ならファーストフード食べるより安いしここにするか」

二人は互いにランチで食べる好きな料理を三品決めると、他愛もない話をしながら中華料理屋へと入っていったのだった。

第三話

中華料理屋で食事をし、街中にあるゲーセンでメダルゲームや格闘ゲームで遊んでいた頃にはすっかり日が暮れてしまったのか、二人が外に出た時には既に夕日が映し出されていた。

今か今かと沈もうとしている綺麗な夕焼けを見上げ、彼らはたわいも無い話で盛り上がりながらも、それぞれの家へと足を進めて行く。

「今日は楽しかったぜ。んじゃまた今度な！」

道端で彰と別れた後、紫苑は無事に家へと帰宅した。

ただいま、と声を掛けて玄関の扉を開けると、今にも待ち切れないぐらいの美味しそうな匂いが漂ってきており、早く食べたいと言わんばかりに彼のお腹が鳴る。

玄関のドアを閉めて、靴を脱ぐと、奥から途切れ途切れに聞こえてくる会話に耳を澄ませた。

会話の内容からして、今日は彼の誕生日のために美味しいご馳走を用意しているらしい。

彼はリビングへと行くと妹の紗枝さえが母親と一緒に作りたての誕生日ケーキを準備している所だった。

「あつ、お兄ちゃんお帰り！」

帰ってきた兄の姿が見えたのか、妹は嬉しそうに話しかけてきた。何かいいことでもあったのだろうか、と紫苑は思いながらも、リビングを後にし二階にある自分の部屋に荷物を置いた。

そして、彼が再び戻ってきた時には既に夕食の準備がされており、紗枝は手作りケーキをテーブルの上へと運んだ。

「お兄ちゃんがチョコレートケーキがいいっていうから、二人で頑張って作っただよ！」

「もう……紗枝ったら、稀に見ない勢いで、一緒にケーキ作るって言い出したのよ。いつもは私一人で作ってたのにねー。彼氏でも出来たのかかしら……」

「そ、そんなこと無いよ！私はいつでもお兄ちゃんの事大切にしているもん！」

母親のからかいの言葉に妹は少し焦った表情を浮かべて反論した。恐らく、この反応を見る限りでは妹には好きな人が居るのだろう。その人の為に母親からケーキの作り方を指南してもらったようだ。機嫌が良かったのも頷ける。

紗枝は恥ずかしいのか、少し頬を赤らめながらも、さっ、早く食べないと料理冷めちゃう！と彼らを急かしつけて席に座らせた。

「お父さん、今日も仕事で遅くなるって。いつも誕生日の時にお祝いでなくてごめん、って電話で言ってたよ」

紫苑が帰ってくる前に父親から電話があったのか、紗枝はそう告げると少し寂しそうな表情を浮かべた。

彼の父親は主に夜勤がメインの仕事の為、中々夜頃に家に居ることは少ない。

「しょうがないよ。父さんの仕事も大変なんだから……先にご飯食べようぜ」

いただきます、と一同が手を合わせた後、まずは彼女らがハッピーバースデーの音楽に合わせて歌い、紫苑は彩り豊かな蝋燭に灯った

火を消した。

消された蠟燭を抜いた後、母親と妹が作った特製チョコレートケーキを切り分けて口に運ぶ。

「ん……！美味しい！」

ケーキが余り好きではない紫苑だが、母親の手作りケーキだけは特別だった。

母親が作ったケーキは甘さ控えめのビターチョコレートが使用されており、甘いものが苦手な紫苑でも食べやすくなっているからである。

余談だが、紫苑はケーキよりも和菓子の方が好きで、幼馴染の彰とは正反対の好みのため、いつも何処かのスイーツ店へ食べに行こうとする際、揉めることが多い。

「私も頑張って作ったんだよー。お兄ちゃんが嬉しそうで何より」

満面の笑みを浮かべて、妹も自らが製作に携わったケーキを食べ進めていく。

皆が満足に食べ終わったのは夕食を摂り始めてから、一時間半後のことであった。

紫苑は満足した一日だったのか、風呂に入ってから、自室へ直行してベットに横になった後、すぐさま深い眠りについてしまった。

第四話

「っ……！」

深夜零時過ぎ。

家族との楽しい一時が終わり、一息眠りについていた頃、彼は嫌な汗と胸苦しい感じを覚えて目を覚ました。

目を開けるといつもと変わらない綺麗に整理整頓された自分の部屋が目映る。

だが、その様子は余りにも無機質で何も音が聞こえない。

ふと彼は窓枠の方に目を向けるとそこには異様な光景が立ち並んでいた。

「なんだありや……！」

窓の外にはボロボロになった黒い布を羽織った人らしき者が宙に浮かんでいる。

その者の目は虚ろで何も光を宿していない。

彼はこれは夢だと思い、もう一度目を擦って辺りを見渡すが状況はそう簡単に変わるはずはない。

その時、彼自身の中で何かの勘が働いたのか、急いでベットから降りたと同時に窓の外に居た者はガラスを叩き割り、部屋に侵入してくると何の躊躇も無く、持っていた鎌らしきものを彼に向けて振り下ろす。

一時期入部していた運動部で鍛えた運動神経が功を奏したのか、ギリギリのタイミングで彼は避けるが、近くに身を置いていた本棚は見るも無残な状態へと切り裂いていき塵と化していった。

黒焦げになる本棚の様子を見て、紫苑は今の攻撃は夢ではないこと

を思い知らされた。

恐怖で足がすくむが、命だけは背に腹は変えられない。

無理やり足を振り上げてドアの前へと走っていくが、何らかの力が働いているのか強い力で叩いてもドアは開かない。

近づいてくる敵に絶望感を感じながらも、避けるために後ろへ下がるが、無情にも壁に当たってしまう。

——これで、俺の人生も終わりか……。

今までの出来事を走馬灯のように思い出しながらも、彼は目を瞑る。そして黒い布を羽織った者は彼に向かって確実に鎌を振りかざした。

——何だ、この感覚は。

手に違和感を感じて目を開けると、腕を庇った自らの手に透明な剣が握られていた。

その剣は攻撃をしようとしていた鎌の動きを止めている。

彼はその剣が一体何なのかを不思議に思いながらも、ここがチャンスとばかりに一線を振るった。

突然の反撃に黒い布を羽織った者は対応できず、体制を崩す。

そして痛みと苦しみで大きな咆哮をあげ、眩い光を発しながら小さな光の粒となって消えていった。

それと同時に彼に握られていた透明な剣は形を失い、液状と化して床に雫として落ちていった。彼は濡れた床に触れてみる。

「なんだこれ……水か？」

「そうよ。貴方は枕元にあった水を利用して物体を具現化させたのよ」

「!？」

突如響き渡る若い女性の声。

周りを見渡すが、部屋には誰一人居ない。

「こつちよ、こつち」

「う、うわあああ!」

振り向くと突如後ろから、ストレートに伸ばした薄く綺麗な青い髪と純白の肌が目立つ女性が降り立った。

彼より少し年上なのだろうか。碧眼から覗かせる瞳は何処か強い力を思い立たせるが華奢な体のせいでその表情は幼く見える。

彼女は髪を靡かせ、こちらに視線を向けてきた。

「まさか、此処で具現化させるとはね……。この世界は魔術と幻想なんて程遠い世界だったのに大したものだわ。でも、それと同時にこの世界でも死神が現れるなんて……」

「ちょ、ちよつと待ってくれ!突然の事が多すぎて俺には何が起きているのか全くわからないんだが……」

混乱しているのか紫苑は上手く言葉が回せない。

彼女は彼に近づき、落ち着かせようと純白が目立つ手を差し伸べる。そして、深呼吸を繰り返させ、ある程度の落ち着きを取り戻した彼を見て安心したのか、彼女は再び言葉を紡ぎ始めた。

「勝手に話し始めて悪かったわ。確かに、見知らぬものがいきなり現れたら突然動揺しても仕方が無いものね……。自己紹介が遅れたわ。私は、水の精霊神・リリアよ。貴方は——三日月紫苑という名前で合っているかしら？」

突然自分の名前を当てられて紫苑は驚きを隠せない。

彼女は表情も予想済みだったのか、表情を崩さず彼の顔を見つめている。

「どうして俺の事を知っているんだ？というか、水の精霊神って……」

「簡単なことよ。素質がある貴方に私の力をちよつと上乘せした時に、全部精神を通して流れてくるのよ。まあ、いきなりというのもなんだから順を追って説明してあげるわ」

彼女はそう言うと、枕元に放置してあったミネラルウォーターのペットボトルの方に向かうと一指し指を軽く振った。

その瞬間、ペットボトルからは大量の水が湧き出るように現れ、一つの塊として集まり始める。

揺れていた水は部屋を中心に固まり始めて洗面所にある大きさの鏡となり、彼の顔を綺麗に映し出した。

鏡は先ほどの剣と同じく、水特有の透明感が漂っており、見るものが全てが完璧に映し出されていた。しかし、この時彼は妙な違和感に気が付いた。

「あれ、俺の髪の毛と目が……」

鏡に映った自らの表情はいつもと変わらない。

だが、髪の色と瞳の色が、普段の黒髪・黒目ではなく、彼女と同じ

薄く綺麗な青い髪色と碧眼の瞳へと変化していた。

彼がリリアに問いたただそうとした同時に、彼女は彼の聞きたいことにすかさず答えた。

「今、私が能力ちからを使ったからよ。貴方の中に眠ってる水の能力が反応しているのね。こうしてみる限り、貴方は水との相性がよほいいみたいね。ああ、安心しなさい。力を解除すれば、髪の色と目の色は元に戻るわ」

彼女はもう一度指を一振りすると美しく映し出していた鏡は崩れ落ちて水となって床に落ちていく。

そして、彼女が指を弾くと床にあった水は直線を描きながら枕元にあったペットボトルの中に戻っていき、何事も無かったかのように佇んでいた。

まるで一つの奇術を見せられているような気分であった紫苑は呆然と佇みながらも我に返る。

「物を操ったりするなんて……まるで、魔法使いみたいだな」

「あら、そう？これは魔術と幻術を融合させて出来た四元素を利用した術なのよ。」

応用さえ利かせれば、さっきみたいに水を戻したり出したり固めたり具現化させたりすることも可能だわ。因みに四元素とは火・水・風・土の事で、これらの物質がある限り、無限に物を具現化させることが出来るわよ。でも、四元素を利用した術を使いこなせるのは本当に稀な例で、元々の素質がないと使いこなせないの。まあ、詳しいことは向こうで教えてあげるわ」

「詳しいことは向こうってどういう事だよ？」

訝しげに顔をしかめる彼を見据えながらもリリアはベットに腰を下ろした。

突如、窓枠に手を当て何か一言呟いた途端、彼女の周りに青白い光が発せられる。

彼が眩しい、と思った瞬間には、散乱していたガラス片は一つ残らず消え去り、窓枠やガラスは全て元通りになっていた。

「なっ……！」

「ガラス片が散らばってたら寝るとき困るでしょ？」

そんな事より……と彼女は再びベットの上に座り込み、綺麗に修復された窓を開けると、長い髪を夜風で靡かせながら再び言葉を紡ぎ始める。

「此処からが本題ね。貴方にはこちらの世界で出現している死神を倒してもらいたいのだ。」

死神とはさっきの黒い布を羽織った者の事で、彼らは生きている人間の魂を取り込んで自らの糧にする。糧にされた人間の魂は二度と輪廻転生の道を通ることが出来ずに、己の魂を蝕む痛みに一生苦しまなければならぬ。私達はそれを防ぐ為に死神を討伐していかなければならないのだ。」

「へえ……そうなのか……。でも、そっちは魔術が発達した世界なんだろう？退治できる人間なんて数え切れないくらい居ると思うけど……」

「それがそうもいかないのよ。死神は特殊な存在で、一般的に学ぶ魔術手段では対抗できない。唯一倒せるのが、四元素を利用した術を使いこなせる者のみなの。死神は実在する物質を受けることが一

番の弱点。人工的に作り出した物では対抗できない。例えば、魔法の光や水なんかがそうね。あれは別次元の所から物質を掛け合わせて生み出した物だから」

「なるほど……。えーっと……。つまり……簡単に倒せないから、素質がある俺に貴女の世界の死神退治をお願いしたいと？」

そうね、と彼女は手を頬にのせ足を組んだままそう答える。

突然の討伐依頼の話に彼の頭の中は疑問で一杯になった。

そして、その中で一番の疑問を彼女にぶつける。

「ちょっと待てよ。もし、そっちの世界へ行ったらこっちの世界の俺の生活はどうなるんだ!？」

「それは心配要らないわよ。私の世界は貴方の世界とは反対に時間が回ってるし、第一、貴方が居ない間はこの世界の時間は貴方なしでも過ごせるように変わっているから」

「そんな無茶苦茶な!確かにそれでこっちとあっちが行き来できるのは分かったが、俺の睡眠時間どうなるんだよ!時間が反対に回ってるなら寝る時間無いじゃないか!」

「寝る時間? そんなの確保するのは容易いわよ。あっちの世界の人々は睡眠時間が三時間なんてザラよ。全て魔術で補ってるから。魔術で寝る時間を補強してその二倍、三倍の睡眠力を確保してる。その心配は及ばないわ。さて、どうする? 私と一緒に来る?」

髪を靡かせ、妖艶な笑みを浮かべたりリアの姿を見た彼は呆れたようにため息をついた。

どうやら心が読める彼女は彼の心情に気が付いたらしい。

「そんなの行くわけないじゃないか、か。貴方、分かりやすいわね」

「勝手に人の心読むなよ！」

「読んでるわけではなくて流れてくるのよね。でも、これは忠告しておくわ。こつちの世界に居る時は力が減っているの。貴方も私もね。私の力は此処の世界ではさっき以上の力は使えない。さっきの奴以上の力を持った奴には対抗出来ないと思っておいたほうがいいわね。」

まあ、死神ランクで言えばCの下ランクまでなら何とかなるわ。でもそれ以上だと死を覚悟しておいたほうがいい。死神は全て私の世界のルートを使って貴方の世界にやってきている。つまり、私の世界で足止めしておけば貴方の世界にやってくることはないということよ」

今までと違う彼女の真剣な表情を見て、彼は一瞬言葉を詰まらせずには居られなかった。

鋭い瞳が彼の目を見据えている。

先ほどの戦いは自らの素質能力と彼女の手助けがあつてこそ、退けられた。

だが、あれ以上強い奴が現れないとも限らない。

それに――彼には大切な家族がいる。

この世界で彼らを危険な目にあわせて、一人でも命を落としたとなれば……想像もしたくない。

彼女の言葉によって彼の気持ちは決まった。

「分かったよ。死神退治引き受ける。親と妹を守りたいんだ」

「私もそれなりにサポートを行うわ。一緒に頑張りましょう」

さて、話も決まったことだし、とリリアは呟くとベットから立ち上がった。

彼女は空中で円を書くように一振りすると、何処からか水が沸きあがって物質を具現化するとクローゼットぐらいの大きさの水の扉が出来上がった。

透き通った水の色は自身の姿をぼんやりと映し出しており、何処か脆い感じを漂わせており彼は少し怖気づいた。

彼女は既に水の扉の向こうへと足を踏み入れている。

「大丈夫よ。脆く見えそうだけどそれは見た目だけ。実際には今、地面に降り立ってる床と同じだから」

リリアにそう言われ、彼は勇気を振り絞り一歩前に踏み出す。

彼女の言うとおり、水の扉は今さっき立っていた床の感触と全く変わらず、彼は安心してまた一歩ずつ足を踏み出した。

そして、彼女に手を引かれ、前へと歩き出すと同時に水の扉は彼の部屋から姿を消した。

第五話

紫苑とリリアは水の扉に足を踏み込んだ後、中にある一本道をひたすら歩き続けていた。

彼女曰く、三分程度で着くとの事だが、いかんせん一本道のみなので思ったより体力の消耗が激しい。

辺りを見渡すと壁は万華鏡のような構造になっており、歩みを止めない二人の姿をずっと映し出している。

床からは水特有の冷たさが薄っすらと足に刺激を与えるがその感覚はとても心地がよい。

無言で足を進めていくのが辛くなったのか最初に口火を切ったのは紫苑だった。

「なあ……一つ聞き忘れていたんだが」

「何かしら？」

突然の問いかけにリリアは歩みを止めて、彼の方向へと振り返る。

彼のその表情は先ほどとは打って変わって真剣に満ちた表情だった。

「さっき死神に襲われた時、かなり派手にガラスが割れたけど誰一人起きてこなかったのはどうしてだ？」

「——あれは死神自らが辺りの時間が止めていたからよ」

「時間を止める？そんなことも出来るのか？」

「死神は目標者^{ターゲット}の周りの時間を止める事ができるの。理由は目標者

を知る人物らに邪魔されないようにする為。だから、あの時ドアが開かなかったでしょう？」

思い当たる節があるのか紫苑は何かに気が付いた様に自らの行動を思い出していた。

追い詰められたあの時、外へ出るためにドアノブを回そうとしたが、外部からの何らかの強い力によってドアは微塵にも動かなかった。彼は納得した表情を浮かべる一方で、他に何か気になることがあるのか、再び彼女に話を振る。

「確かに……あの時はドアが開かなかった。でも、それが正しいのなら何故俺は動くことができたんだ？その話じゃ物体や人体が持っている時間を全て止めてしまうのだろうか？」

「そう、そこが重要なポイントよ。死神に対抗できる能力者は死神の時間干渉が効かない。唯一の例外ってとこね……。そうこうしているうちにそろそろ目的地に着きそうよ」

透き通るような綺麗な指先を向けたその先には一枚の扉が佇んでいた。

その扉は最初に踏み入れた水の扉と同じく、透明感溢れる薄い青色をしており、リリアは扉に近づいてドアを押し開けた。

二人がドアを開けたその先にはレンガ建ての建物が立ち並んでいたが、不思議な事に道路には一つも車が通っていなかった。

彼は隣にいた彼女に問いただと、この世界では車というものは存

在しておらず、移動手段は各自が家に持っている扉か術者自身の移送方陣で行うかららしい。

狭く細い道を切り抜けると、人が沢山行きかう大通りに出た。広場にある大きな塔時計は鐘を鳴らしており、丁度お昼時のようだ。近くにある商店街では沢山の人が行き交っており、人々はカフェで食事をしていたり、露店でテイクアウトを頼んでいる。

「此処が、魔術と幻術が融合した国、アルトウーロよ」

魔術と幻術が融合した国・アルトウーロ。

その歴史は千年以上前にも及ぶほど古い歴史を持った国家で、現在では魔術と幻術が融合した国として名を馳せている国である。

特に魔術と幻術の融合術は一般家庭にも広く利用されており、今や魔術と幻術は切っても切り離せない存在となっている。

その証拠に彼らが居る大通りでは、水道水を操り玄関先の花の苗に水を与えているものや、タバコを吸う為、指の先から火を出して一服している者などがあちらこちらで目に映る。

「魔術が融合した国——アルトウーロ、か。素敵な国だな」

まるでファンタジー映画のワンシーンを見ているかのように日常で繰り広げられる魔術と幻術。

彼はその光景にひたすら心を奪われるしかなかった。

「これが、私達の日常よ。さて……と。私の家へと案内するわ」

リリアは見とれている彼の右手を引っ張ると大通りから少し外れた路地へと歩き始めた。

彼としてはもつと間近で見ていたい気分であったが、彼女が歩みを止めない為、黙って付いていくしか無い。

第六話

二人は大通りを出て、狭い路地へ入ると、閑静な住宅街が立ち並ぶ場所へとやってきた。

——そして、その先を歩き進めること十分。

風情赴く一つのレンガ建ての家に着いた。

赤色のレンガで建てられた家は何処か中世ヨーロッパに出てくるレンガ造りの家のデザインを思い出させる。

玄関に佇んでいた鉄の扉は魔術が仕込まれているのか、帰ってきた主を出迎えようと扉を開くが、彼女の趣味なのか何故か玄関の門には宝石などが散らばって埋まっていた。

彼はその扉に手を掛けながら、少しデザインを眺める。

「ルビーにサファイア、エメラルド、アメジスト……凄い、まだまだ埋まってるぞ。」

こんなに埋めてどうするんだ？ 宝石ならこんな雨風曝してたら価値が下がるのに……」

勿体無い、と足を止めて呟いている彼の姿を見たりリアは驚きの表情を浮かべてこちらへ向いた。

まさか驚いた表情を浮かべると思わなかったのか、思わず彼も彼女を見返してしまう。

「そんなに珍しいの？」

「ああ。俺の世界では宝石と言ったら装飾品に使っただけ。特にこれだけ大きくて綺麗な物なら億単位で売れるからな。それより、何でこんなに宝石を散りばめてるんだ？」

「宝石を散りばめているのは——人外者対策よ。この魔術で特殊加工された宝石を仕込んでおくとな魔除けになるわけ。もっとも、魔除けと言ってもある程度のレベルになると耐え切れずに砕け散ってしまっけれどね。この家の門に使われてる宝石ならBランクの上ぐらいの人外者なら効果を発揮するわ」

リリアは彼に説明を終えると、もう一つの鉄でできた扉に手を掛ける。

彼女が手をかざすと、目の前にあった扉には水色の円形が浮かび上がり、六芒星の形を結ぶ。

それと同時に扉は小さな音を立てて開いた。

紫苑は彼女の後に続いて扉に入ると妙な違和感に襲われた。

「何だこの感覚……」

広間はいたって普通の作りで、辺りにはモダンな家具やアンティーク風の骨董品、美術品が立ち並んでいる。

しかし、どうしても彼は自らの不思議な感覚に違和感を覚えずにはられない。

そう、これは例えて言うならば——

「水の中に入った時に感じる圧迫感——でしょう？」

言おうと思っていたことを彼女に言われ、彼は軽く頷いた。

彼女は、部屋を中心へと足を進めて彼の方へと振り向きかえる。

「この部屋はダミーよ。本当の部屋の道はもう少し先のほうへ隠してあるわ。いつ敵が襲ってきても対応出来るように、ね。この部屋は水鏡の中の世界。鏡に映ったものの世界だから、こうやって映し出しているの。それに、いくら具現化させたとしても、水鏡の元の

素材は水だから、今は水中を歩き回っているのに等しいぐらい。特に貴方は水との相性が強いから圧迫感を感じる。まあ、この圧迫感には能力に慣れたら不快にも感じなくなるから安心しなさい」

彼女は壁に手を添えると、壁はポツカリと穴が開き、一つの部屋が見えた。

恐らくこの部屋が本当の部屋なのだろう。

彼は穴をまたいで飛び降りると、そこには先ほどと同じ部屋が佇んでいた。

先ほどの部屋との最大の違いは水による圧迫感の無さと机の上にティーセットが置かれている事だった。

「水鏡に出る間に、そこらへんの水を使って具現化しておいたの。続きはお茶をしながらでも話をしましょ？」

彼女は彼をソファーに誘導すると、机の上に置いてあったティーセットを使い、お茶を用意し始めた。

部屋の棚から紅茶の葉を取り出してポットへ入れると、近場にあったヤカンを取り出す。

そしてそのヤカンをキッチンへと持っていき、蛇口をひねって水を入れるとガスコンロの上に置いた。

彼女はコンロを回して火を付けると再び紫苑がいる部屋へと戻ってきた。

「魔術は使わないのか？」

やけに原始的な方法でお茶を点てている彼女を見て、紫苑は質問せざる得なかった。

彼女は音を出す沸いたヤカンを取りに行き、ポットの中にお湯を注ぎいれる紅茶の手を止めず、彼の言葉に耳を傾けながらもこう切り

返した。

「魔術を使ってお茶を点てるより、自分で淹れたほうが美味しいから。あくまでも日常的に使う魔術は補助的な手段であって、それをメインにしまったら駄目なのよ。私はそればかりに頼って生きてきて自滅していった人間を沢山知っている。貴方にも魔術で何でもこなそうと思う人にはなって欲しくないわね」

意外な言葉に紫苑はそれ以上何も言えずに黙ってしまう。

そして彼女が淹れた香り高い紅茶に口をつけて、渡されたプレーンクッキーを貪りながらも再び話を続けた。

「で、さっきの話の続きなんだけど……」

「ああ、そうね。水との相性の話まで終わったのよね……。さて、何処から話を進めていこうかしら」

彼女は机の引き出しを開けて中にあった資料を取り出すと彼に数枚手渡した。

手渡された資料には日本語でこの国の主な歴史と魔術と幻術の基礎知識について示されていた。

疑問に思った紫苑は彼女に問いただすと、彼女曰く、この紙は特殊で、紙全体に対象者自身の言語で読めるように魔術が組まれているから、らしい。

彼はまず概要に目を通すと、この国の事と魔術と幻術についての事が詳しく書いてあり、その中の重要な言葉の部分を引き抜いて読み始める。

“魔術とは異次元の空間からあるものとあるものを組み合わせる物や現象が生じるようにする術である。起こせる術の大きさは術者

自身の経験と才能に左右される。

幻術というのはその文字の通り幻まほうを利用した術であり、敵を欺いたり、ごまかしたり出来る。それらを掛け合わせて作ったのが幻魔術であり、現在ではこの三つの術が主に利用されているのである――”

つまり魔術は紫苑が住んでいた日本の科学に近い存在であり、それらの術も魔術からの派生した物と言う事らしい。

納得した表情を浮かべる一方で、紫苑は資料内容に驚嘆せざる得ない。

「へえ……三つの術が主流なのか」

「そうよ。攻撃には魔術、守りには幻術が利用されることが多いわね。幻魔術はその二つが入り混じったような感じよ。例えば、敵を欺いて反撃したい時はこの術が使われることが多いわ」

次に紫苑は紙を捲っていく。そしてとある部分が目に付いたのかその部分について目を追って読み始めた。

表題の目次には特別な魔術と書かれており、彼の中にある好奇心をさらに引き立てる。

“――唯一の例外について。

魔術・幻術・幻魔術のどれかを扱うのが一般的だが、例外的にこれ以外の術を扱う存在が居る。

それは、四元素魔術と言い、第四の術として言われている。

四元素魔術とは四元素を利用した魔術の派生術であり、火・水・風・土のどれかを原料として扱う特殊な術である。

なお、この術は素質がある者にしか使えない。そして術発動の毛色が違ふことから一般的な魔術・幻術・幻魔術を利用することが出来ない”

この部分に違和感を感じたのか紫苑は向かいに座っているリリアに視線を向けた。

「この文献が事実なら、何故、リリアは魔術を使えるんだ？」

「例外の例外、というものがあってね……。この文献に書かれているのはあくまでも“一般人”の事についてのこと。私達、精霊神は人間とは違う特殊な存在だから、四元素も利用した術も使えるし、一般的な術も使うことも出来るわ」

その瞬間、リリアの表情が少し変わったように見えたが、彼は気にせず、彼女の解説にそうか、と少しがっかりしたような返事をする。とまたページを捲った。

どうやら、紫苑自身は街中で見た魔術を利用してみたかったらしい。開いたところは最後の部分らしく、捲った部分には彼女ら精霊神について記載されていた。

そういえば、精霊神については一言も触れられていないことを紫苑は頭の中で思い出しつつも、記載された所をピックアップしながら目で追い始めた。

“——精霊神の存在。

この世界を守るのに重要とされているのが精霊神である。

全部で精霊神は四人おり、それらは全て四元素を元にして成り立っている。

しかし、神々といえども下界に存在することがたびたびあるらしく、時々目撃証言が飛び交うが事実なのかどうかは定かではない”

「四人という事は、リリア以外にも居るって事だよね？」

「そうね。私、水の精霊神・リリア以外にも火の精霊神・アルテュール、風の精霊神・フラン、土の精霊神・ゴットフリードがいるわ。これらの全て揃って四精霊神と呼ばれていて、ある場所の神社では祭られていたりするみたいだね。——その資料読んで何となく分かったかしら？」

彼は何となくわかったような気がする、と曖昧な返事をしながらも、大体の事は把握できたらしい。

リリアは渡した資料を彼から受け渡してもらい、机の上に置く。

「宜しい。では——早速、実技について教えるからこちらに来なさい」

席を立ち、あるドアの前で手招きするリリア。

紫苑はティーコップを机の上において、彼女の元へと歩いていく。

そして、彼女は彼に手を置いた瞬間。

何らかの力が掛かったように彼らの体は一瞬にしてふわりと浮き上がり、部屋から消え去った。

第七話

次の瞬間、紫苑が目を開けると――真っ白い空間が広がっていた。壁も床も全てが純白に包まれ、慣れてない彼の目には少し痛みを感じ始める。

此処は無限フィールドと呼ばれ、彼らたちが住んでる三次元の世界とは別次元にある精神世界であり、彼女曰く主に戦術を学ぶ為の闘技場としては打ってつけの場所らしい。

「此処なら邪魔されることもないし、集中して実技に励めるわ」

「でも……此処は何も無いじゃないか。それに白が強すぎて目が痛い」

「だからこそよ」

彼女はそう言っただけで紫苑をフィールドの中心部へと連れて行くと、有無を言わず彼を床に正座させた。

彼の姿を見てそれ以上何も言わない彼女が気になるのか紫苑はせめぎ立てられずにはいられない。

「どういつ了見でこういう事をしているんだ？大体……」

紫苑がもう一言言おうとした瞬間、突然彼の目の前から何かが飛んできた。

間一髪ので彼は頭を下げて飛んでくる物を避ける。

後ろを振り返って、よく見てみると投げられた物は水で具現化させた透明感溢れる小型のナイフであり、純白の壁へ綺麗に刺さっていた。

何かの危険を感じたのか、彼はそれ以上何も言わない。緊張と恐怖から背に冷たい汗が滞り落ちる。

「今、貴方が避けれたのは反射神経が良かったこともあるけれど、ナイフの動きを集中して見極めれたからよ。四元素魔術を利用するのに不可欠なのは精神集中力。これが続かないと具現化する所か、己の力を暴走させて自滅へと追い込む。まずは集中力をつけるようにしなさい。そうしたらこの純白の壁も気にならなくなるわ」

「ちょっと……今のまともに受けてたら死んでたんじゃ……」

「いいからやってみなさい」

リリアは彼の反論を聞き流して、床を指す。

紫苑は先ほどの恐怖感に慄き、少し半信半疑に思いながらも、姿勢を整え目を瞑り集中する。

しかし、彼が集中しても何も変わらないどころか段々と眠気が襲ってきて思わず、夢の世界へと落ちそうになった時、背中に少しばかり痛みが襲った。

手で触れてみると冷たい感触があることから、どうやら水が飛んできた事に違いなかった。彼女は彼の後ろで水の弾を作りながらこちらを見据えている。

「寝て誤魔化そうとしても無駄よ。近くにいる限り貴方の心は私の中に流れ込んでくるのだから。……ちゃんと集中できる間、私はこの水の塊を投げ続けるわよ。本当に集中ができた時、貴方はこの弾を避けることが出来るはずよ」

次々に当たってくる水の弾。

だが、弾に気を取られてしまい中々自身の集中へと追い込めない。

原料が水であるためか、あまり痛くは無いが、何発も打ち込まれていくうちに、紫苑の体の体温はゆるやかに下がり始め、寒気を感じ始める。

——どのぐらい時間が経ったのだろうか。

ひたすら彼女は彼に向かって水の弾を作っては飛ばし当てている。もう何発も彼女が投げたのか分からないぐらいまでに彼の体には水が当たり服はずぶ濡れになっていた。水の冷たさからか彼の息遣いは最初に比べて少し荒くなってきた。

「……リリア、もうそろそろ、辛い……だけど」

「駄目よ。貴方がちゃんとこの弾を避けるまで、私は投げ続ける」

最初の優しい印象とは違い、今の彼女の表情はまるで弟子に対する鬼師匠と化していた。

そして、彼女がある一発の水の弾を投げた瞬間、突如、水の弾は軌道を変え、彼女のほうへと進みよってきた。

彼女は何かを予想していたのか、直ぐに水の盾を具現化し、いとも容易く弾をはじいた。

弾かれた水の弾は白い壁に当たり、消滅する。

「なん……だ、今の……？」

当たらない水の弾に違和感を感じたのか、紫苑は体勢を崩し、ずぶ濡れになった体を引き起こして集中を解いた。

今の事実が信じられなかったのか目を開き、驚きの表情を浮かべている。

その表情を見たりリアは先ほどとは打って変わって、優しい表情を浮かべて彼の方へと歩み寄っていく。そして、ずぶ濡れになって少し体を震わせている彼を軽く抱擁した。

「どうやら上手くいったみたいね。よく頑張ったわ。ごめんなさいね、手っ取り早く集中力を付けられるようになるにはこの方法しかなかったの……申し訳ないと思っっているわ」

抱きしめる彼女に紫苑は少し顔を赤らめたが、直ぐに不機嫌な表情に変わり、彼女とはあさつての方向を向いた。しかし、その表情はまた直ぐに変わる。

彼の表情から見るに、まんざら怒っている訳でもないようだ。

「こんなことなら最初から言ってくれよ……。それにリアみたいな美人に謝られたら、男としてこれ以上何も返せなくなっちゃうじゃないか」

そう言って紫苑は再びリアの方へと振り向きかえる。

意外な言葉に彼女は笑みを零しながらも、立ち上がりを補助する為に彼に手を差し伸べた。

紫苑は彼女の手を取って体を起こすが、その時ふと頭の中に疑問が沸き起こる。

そして自身の体を見つめて、思考を巡らした。

（あの感覚は何だろう……。まるで、自分の体から何かが湧き出たみたいだった）

水の弾が当たる瞬間。

彼の体の中から何か違うものが飛び出たような感覚に襲い掛かったからだ。

「あれが、水の能力よ。あの感覚を覚えておきなさい」

心を読んだのか、リリアは彼に何も聞かずそう答えた。

彼女は彼の濡れた服に触れて呪文を唱えると、淡い赤い光が彼女の手の中から灯し始め、見る見るうちに彼の服は乾いていった。

リリアは彼の服を軽く整えた後、紫苑の方を見据えて言葉を紡ぎ始める。

「一度経験しておけば、後は慣れね。使えば使うほど体が覚えていつて、意識せずとも出せるようになるわ。今日は此处までにしておきましょう。帰った後、シャワーでも浴びなさい。その間に暖かい飲み物でも淹れるわ」

リリアは紫苑を手招きし、壁の淵へと連れて行く。

そして来た時と同じように彼女の手をとった途端、目も開けられないほどの強さが襲い掛かり、彼らの体は一気に浮かび上がりこのフィールド上から消えていった。

第八話

彼らが次に目を開いた途端、純白の壁に包まれたフィールドは既に消滅し、元の彼女の応接間へと戻っていた。

紫苑は彼女に脱衣所へと誘導された後、シャワーを浴びる。

彼が入浴している間にリリアは新しい服を用意した後、神妙な面持ちで応接間のソファアーヘ腰を掛けていた。

（さて……これからどうするか）

本来ならば、実戦経験も兼ねて、下界で活躍している四元素魔術の使い手の元へ送り、経験を詰ませる。

その方が早く力を制御出来るし、戦術も覚えやすいだろう。

しかし、彼女は何か気がかりなことがあるのか、思考を止めようとはしない。

暫くして、あまり考えても仕方が無いと悟ったのか、考えるのを止めて、手元にあつた紅茶のカップに手を伸ばして啜った。

（——まあ、この事は本人が気づくまで言わないでおきましょう。今、彼に混乱されたら私達の世界は狂ってしまう）

「どうしたの、リリア？」

リリアが横を振り向くと、既に彼女が用意していた服を着た紫苑が現れた。

何処となくあどけなさが残った彼の表情はとてもしきりした様子で、まだ髪の毛は乾ききっていないのか若干湿っていた。

どうやら彼からみて、彼女は結構考え込んだ姿をしていたらしい。

「いいえ。なんでもないわ。ちょっと今後についての予定をね」

リリアはいつもの表情へ戻して、彼に話し返す。

彼を向かいのソファアの席へと進めると、彼女は今後の予定について話を始めた。

「今後の予定についてなんだけれど……。明日から実戦経験として討伐に参加してもらおうと思うの」

「明日！？今日引つ張ってきて明日って……いくらなんでも早すぎないか？」

余りにもハイペースな予定に紫苑は驚きを隠せない。

しかし、彼女は予想していたのかあまり表情を崩さなかった。

驚嘆している紫苑をよそに、彼女は話を進める。

「討伐の経験は体で覚えたほうが早いわ。明日、貴方の指導者との面会があるから今日は早く休んでおきなさい」

彼女にそう言われ、紫苑は若干驚きと不安を隠せずにはいられないが、決まっているのであれば仕方が無い。

彼女は彼が泊まる客人ルームへと案内し、その日の夜は更けていった――。

翌日。

窓から日が差し込んでおり、今日も穏やかな天候である予兆をたてるような早朝である。

趣を感じさせるアンティーク物が多く置いてあるこの部屋で、顔に

何らかの冷たい感触を覚えて、紫苑は目を覚ました。

「な、なんじゃこりゃ！」

突然の光景に驚きを隠せず、思わずベットから転げ落ちてしまった。その瞬間、彼の顔の周りで蠢いていた水の固まりは形を崩し、彼の頭上へと一気に流れ落ちる。

幸いにも水の量が比較的少なかったことから、全身がずぶ濡れになることは無かったが、彼の顔の周りは水で滴り落ちている。

困惑している彼の視点の先には、ストレートに伸ばした薄く綺麗な青い髪を靡かせた一人の女性が腕を組み呆れた表情を浮かべていた。

「起きるのが遅いわよ。全く……この程度も防げないんじゃ、能力者として失格よ？」

「だからってこんなことしないでいいだろう！」

「全身ずぶ濡れにならなかっただけでも良しとしなさいな。……顔、拭いてから下に降りてらっしゃい」

彼の最初の反応を見て流石に少しやりすぎたと思ったのか、ドアの前にタオルを一枚置くと、朝食の準備をする為に彼女は下へと降りていった。

申し訳程度に置かれたタオルと睨めっこしつつも、顔の周りを拭き、彼女がいるリビングへと向かう。

既に朝食が出来ているらしく、テーブルの上には多くの料理が立ち並んでいた。

「へえ……こつちの世界でも俺の世界と料理が変わらないんだな」

椅子に座り、頂きます、と手を合わせると、手前にあったスクランブルエッグをフォークで掬い口に運ぶ。

牛乳が入っているのか、程よく甘く、隣に置かれたトーストとの相性もいい。

「基本的には発達したジャンルが違っただけだから、料理に関しては大して差はないはずよ。まあ、でも貴方の世界の方が料理のジャンルは多いから、少し羨ましいわね。こっちでは洋食が中心だから」

「いつも朝は和食の方が多かったから……洋食ってなんか新鮮だな」

二人でたわいも無い会話をしながらも、彼女が作った料理を次々に口に運んでいく。

どうやら、彼女の腕は中々のもので、彼は「美味しい」と言いながら、さらに食べ進めていき、わずか十分少々で全てのメニューを平らげてしまった。

彼らの食事が終わり、一緒に片付けた後、リリアは、彼に一つの服を手渡した。

紺色に包まれたコートに銀のふちがデザインされたそのコートは、物語に出てくる派手で壮大な魔術師の服というよりかは、西洋風に格好良くアレンジした冬用コートと言う方がしっくり来るほどの目立つデザインだった。

「これから貴方にはアルトウーロの特殊専属魔術師として活動してもらうわ。これは、魔術服と言って、ある程度の攻撃から身を守ってくれるコートよ。ある程度って言うのは大体、初級魔法の火の玉が飛んできて穴が開かなかったり、魔法加工された普通の剣に当たっても切り裂けない程度だから、油断は禁物よ」

紫苑が渡された魔術服に袖を通したのを確認したリリアは、何らかの呪文を唱え始めた。
途中、何と言っているのか聞き取れなかったが、最後に彼女は大きな声でこう言い放つ。

「扉よ、開け！」

リリアが低い声でそう叫ぶと、先ほどいたリビングが一変、黒い空間へと変わり始め、彼らの下には青い巨大な魔方陣が浮かび上がった。

目を閉じて意識を集中させると同時に、何らかの重力が掛かり始める。

そして、彼女が再び目を開けると、一瞬にして二人の姿は消えてしまった。

第九話

紫苑らが再び目を開けると、レンガの壁に覆われたシンプルな構造の部屋の光景が目映った。

彼らの目の前にはその壁にもたれ掛かり、見据える視線が一つ。

赤い髪を短く揃え上げ、髪と同じ赤い色の瞳と褐色の肌が目に付き、何処か姉御肌を思い出させるような人物だった。

リリアは目の前に立っている彼女の元へと近づき、軽く挨拶を済ませる。

「今日から暫く貴方のパートナーとなる、バーニスよ。彼は三日月紫苑。まだ日は浅いけど、十分な戦力を持っているわ。本日からこちらの部隊に配置されたから、彼の指導をよろしくね」

「三日月紫苑です。バーニスさんよろしくお願いします」

リリアに倅い、隣に居た紫苑はバーニ스에頭を下げる。
だが、彼女は「よろしく」と素っ気無く言っ たつきり何も言わない。

「じゃあ、私はあちらでの仕事があるから戻るわね」

リリアはそう言っ て再び水の扉を開き、消えてしまった。

バーニスとの間に気まずい空気が流れる。

最初に口火を切っ たのは紫苑だった。

重い場の雰囲気にしどろもどろになりながらも、何とか言葉を紡ぎだす。

「バーニスさん、あの、俺は何をしたら……」

「何もしなくていい。今は仕事がない」

「そ………そうですか………」

勇気を振り絞って声を出したのにも関わらず、彼の言葉を待たずに彼女は遮ってしまったため、紫苑はそれ以上何も言えなかった。

どうしようかと紫苑は目を泳がせていると、突如、バーニスの方から話を始める。

「……シオンって名前、珍しいな」

「えっ………？そうですか？」

「ああ。この国ではそういう名前付けないしね」

隅に置いてあるコーヒーマーカーを操作し、炒りたてのコーヒを淹れながら彼女はそう話した。

その時に、ミルクは入れるか？と聞かれ、紫苑は返事をし軽く頷く。それを聞いた彼女は彼の要望通りにミルクを入れ、温かいコーヒの入ったコップを彼に手渡した。

紫苑は渡されたコップに口をつけて啜るが、思いの外熱く、直ぐに口元を離してしまった。

「出来立てのコーヒは熱いからね。気をつけなよ」

熱さで蒸せる彼に、バーニスは微笑を浮かべて飲みながらそう話す。そんな事早く言っただけだった、と紫苑は思いつつも、先ほどの会話の内容を反芻させながら言葉を続けた。

「この国では珍しい名前なんですか……。確かに、此処には紫苑の

花は咲いてませんね」

「シオンの花？」

「俺の世界には紫苑っていう花があるんですよ。それ、母親のお気に入りの花なんです。後はその花が咲く時期に俺が生まれたから、その名前をつけたっていうのもあると思うけれど」

「そうか……。シオンって名前、素敵だな。親御さん、大事にしないよ」

彼女はそう言うと、残ったコーヒーを一気に飲み干し、視線を窓の外へ向けた。

その表情は先ほどとは暗く何処か淋しげだったが、直ぐにいつもの表情に戻る。

紫苑はその表情に少し気になったが、その時、彼女が持っている無線機から連絡が入ったようだった。

バーニスは簡単に返事を繰り返して通話を切ると手元にあったコートを取り、彼に呼びかけた。

「仕事だ。行くぞ」

余計なことは何も言わずにそう告げると、彼女は直ぐに外に出た。

紫苑も遅れを取るまいと直ぐにドアを開けて付いていくと、彼女が彼に手を差し出した。

紫苑が彼女の手を取った瞬間。彼らの周りに強い風が巻き起こる。

風は留まることを知らずに更に更に強い風が吹き荒れ、二人の身体は物凄い勢いで浮き上がっていく。

彼女は風の動きに従ってコントロールしながら、目的地へと向かっていった。

彼らが身を下ろした先は街の中心部からだいぶ離れた森の中だった。昼間であるにも関わらず、辺りは薄暗く、先の見通しも悪い。

バーニスは右手を軽く掲げ、精神を集中させる。

すると、彼女の周りには淡い緑色の光が渦巻き始めた。

それと同時に、彼らの周りに再び風が吹き始める。

「この辺りで死神が彷徨いているという情報があつたらしい。念のために半径二メートル以内の周りに風のシールドを張っておいた。突然の襲撃ぐらいには耐えられるだろう。周りには目に見えない風の刃が渦巻き回っているからな。むやみに出ようとするなよ」

指示に従い、紫苑は彼女の元を離れずに一步一步足を進めていく。奥へと足を運ぶと、そこには大きな滝が音を立てて流れている至って普通の水飲み場だった。

森の中で流れる風は涼しく、状況が状況でなければ、此处で休暇を取りたいぐらい心地の良い場所だった。

「この辺りにはいないようですね」

紫苑がそう言つて、滝が流れている水飲み場へと近づく。

その時、彼女は微かに水面が蠢いていることを見逃さなかった。

すぐさま、右腕に意識を集中させて風を呼び起こし、彼の身体をこちらへと吹き飛ばす。

いきなり風を受けた紫苑は体制を崩し、彼女の元へと転がり込んだ。それと同時に、水面上に黒い人物が、真っ赤に染まった鎌を掲げ彼が今いた場所へと振り下ろす。

振り下ろされた地面にはクレーターができおり、彼女の咄嗟の判

断が無ければ、まともに攻撃を受けていただろう。

風の結界に当たったのか、死神は痛みを感じたように腕へ視線を向けたが、気にせずこちらへと歩み寄ってくる。

バーニスは近づいてくる敵を睨みつけ、すぐさま具現化を開始し始めると、投げナイフぐらいの大きさの風の刃を数十本、周りに出現させて一気に叩きこむ。

だが、彼女の投げた刃は決定的な致命打とはならず、少し苦しそうにしながらも、敵は再び立ち上がった。

「ちつ……。あの赤い鎌のせいだな」

「赤い鎌……？」

「死神は人間の魂を喰らうと鎌の色がどんどん赤くなっていくんだ。人の魂を喰らった死神は例えCランクといえどもBランクぐらいの強さに変わってしまう。……此処は一人じゃ厳しいな。シオン、私は囷になりながら正面からさつきみたいに攻撃を叩きこむ。お前は後ろから攻撃してくれ」

「えっ、そ、そんな……」

「いいから行ってこい！時間の猶予は無いぞ」

何処か不安げな表情で、了解、と紫苑は彼女に返事をするときまに駆け出した。

彼の動きを見つけた死神は直ぐに追おうとするが、風の矢を投げつけて、バーニスは阻止する。

「お前の相手は私だ！」

先ほどと同じく彼女は風の刃を出現させると、腰にかけてあった長剣を取り出し、身軽なフットワークで敵の動きを錯乱していった。

一方の紫苑は彼女の指示に従い、背後から攻撃をするため、大きな滝の元へと走っていくと、すぐさま能力を使うために精神を統一し始める。

しかし、初めての仕事に加え、突然の襲撃に動揺しているのか具現化させても直ぐに液体に戻ってしまう。キャリアが浅い紫苑に具現化が上手くいかないのも無理は無い。

更に焦燥感が彼に襲いかかり、精神統一の邪魔をしてしまう。

（頼む……！頼むよ！）

目の前ではバーニスが囿になって敵の動きを錯乱しており、いくら彼女が風のやり手であっても体力がいつまで持つか分からない。

そうなる前にも早く、早く……と彼は祈るような気持ちで精神を集中させていく。

やがて、集中の我慢の限界を超えたのか紫苑は滝に向かって大きく叫んだ。

「くっそおおお！さっさと具現化しやがれえええ！」

彼がそう叫んだ瞬間。

自らの身体の中で何か別の力が湧いてくるのを感じた。

水色の光が彼の身体を包みこみ、滝から凄まじい量の水が集まってくる。

先ほどまで黒だった髪と瞳は薄い水色に変化し、彼の周りの淡い光が消えた頃には、自らの頭身ほどの長さがある槍が握られていた。

己の手の中にある武器の感触を確かめて、彼は死神に向かって走りだし、背後から横に振り払った。
完全にバーニスに気を取られていた死神は咄嗟の攻撃に痛み藻掻くしか無い。

「悪いな。チェックメイトだ」

苦しそうに息を上げている敵を彼女は冷たく見下ろすと、とどめとばかりに風の刃を数十本で切り裂き、持っていた長剣で死神の心臓を突き刺した。

大きな咆哮を上げ、悔しそうにもがき苦しむと、敵は小さな粒子となって、消滅していった。

その姿を見た紫苑は嬉しさがこみ上げたと同時に地面に倒れ込む。
何事かと思い、バーニスは彼の元へと駆け寄った。

「おい、大丈夫か！？しつかりしろ！」

「すみません……。ちょっと気が抜けたみたいで」

紫苑は数分程、少し一休みすると、彼女の手を借りて立ち上がった。
既に能力を解除しているためか、髪と瞳は元の色に戻っており、先ほどの辛そうな表情は緩和したように見える。

「最初から力の使い過ぎだ。初任務で力を使わせた私も悪いが……。流石にあれだけの力を出せば誰でも疲れるぞ」

「無我夢中に考えてたらこうなっていました……。すみません」

「全く……。今のままじゃ危なっかしくて見てられない。とりあえず、任務は完了したから戻ろう。お前の体力回復が先だ」

彼女はそう言って彼の肩に手を乗ると再び風を巻き起こす。
そして、彼らの身体を舞い上がらせると、先程彼らがいたレンガ造りの建物へと戻っていった。

第十話

「——っ……っ」

——誰だ？

誰かの声が聞こえ、紫苑は目を覚ました。

何らかの部屋の中のように、彼はその床に寝ていたらしい。

辺りの壁は異様としかいいようが無いぐらい純血の赤に染まっており、紫苑は寒気を感じ、体を震わせて起こすと、声がする方へと向かって足を進めていく。

木製で出来た趣のある扉を開けると、そこにはパーティが開けるぐらいの広いエントランスホールが広がっており、その先にある中央の階段の上段で、一人の子どもが泣いていた。

先ほどの部屋と同じぐらいに綺麗に染まった赤色の髪は綺麗に整えられ、その中に輝く灰色の瞳は彼の現在の心情を映し出しているように見える。

「どうしたんだ？」

紫苑は優しい口調で少年に話しかけた。

少年は白いシャツの袖口で涙を拭い、嗚咽を交えて言葉を紡ぎ始める。

「——寂しいんだ。誰も居ないんだもん」

「誰もいない？」

「そう。誰も居ないんだ。一緒に話がしたいのにお話できなくて寂

しい」

少年はそう言うと再び涙を流し始めた。

紫苑はその姿を見て、困ったような表情を浮かべると、ポケットの中からハンカチを取り出して彼の頬を拭う。

少年の手にハンカチを持たせると、子どもをあやすかのように語り始めた。

「じゃあ、俺がお前の話し相手になってやるよ。それなら寂しくないだろう?」

「えっ、本当に?お兄ちゃんが相手になってくれるの?」

「ああ。俺で良ければな」

少年は渡したハンカチで涙と鼻水を拭って紫苑の右手を握ると嬉しそうに笑顔を向けた――。

「ん……」

次に紫苑は目を覚ますと、赤いレンガ造りの壁の部屋が視界に入っていた。

どうやら、移動途中で気を失い、ベットの上で寝かされていたらしい。

彼は体を起こそうとするが、謎の倦怠感が襲いかかり上手く立ち上がれない。

その時、部屋のドアが開き、バーニスが替えの水タオルとお冷をお盆の上に載せて持ってきた。

「あー、ダメだよ。ちゃんと寝てなきゃ」

彼女は荷物をテーブルの上に置いて素早く彼の元へ向かい、再びベットのの上に寝かしつけると、手際よく彼の頭の上に置いてあったタオルと取り替えた。

額に載った冷たいタオルの感触が心地よい。

「能力の使い過ぎで熱が出たみたいだからな。今日一日中は安静にしなよ。変に能力使っと、自分の寿命まで縮めかねんしな」

「そうだったんですか……すみません」

「ん、まあ、最初のうちは能力使って熱が出るのはよくある事だから気にするな。通常魔術や幻魔術でもそういう反応が起きる人もいるしな。とりあえず、今日の所は家に帰ってよく寝ることだな。住所は何処だ？私が送っていくから」

彼女に聞かれた瞬間、紫苑は何かを思い出したように声を上げた。突然、表情が変わった彼に彼女は心配そうに「どうした？」と声を掛ける。

当の彼は目を泳がせ、何処か気まずそうだ。

「いや……。昨日はリリアの家に泊まったんですが、住所知らなくて……」

「んー、そうか。ちょっと待ってろ」

事情を察したのか、バーニスは近くにあった電話の子機を取り、あの番号を入力していく。

通話ボタンを押し、数回の呼び出し音の後、何処かに電話が繋がった。

「もしもし？」

出たのは年配の男で、何処か眠そうな口調で電話口に出た。バーニスはその態度に思わずため息を漏らす。

その口調からして、相手は彼女の知り合いらしい。

「また寝てたのかよ……。いくら、大家で黙ってでもお金が入ってくると言っても、もうちょっと頑張るべきじゃないのか？」

「はは。バーニスちゃんには全てお見通しって訳か。でもね、大家やってても、毎月の料金回収に行くのも大変でね……。で、何か用事があって電話してきたのだろう？」

「当たり前だ。一人分の部屋を借りれるか？」

「ん？ああ、ちょうど一人分の部屋が空いてるね……。誰か入るのかい？」

「まあな。詳しいことはそっち行って説明するから。じゃあ、また後で」

男の最後の言葉を待たずに、手短にバーニスは電話を切り、子機を元の場所に戻すと彼の方へと振り向いた。

「今日は私が下宿してるところで泊まるといい。丁度、部屋が一つ分空いてたみたいだな。」

「えっ……。でも……。」

「ああ、リリアのことは心配しなくていい。私から説明しておくから」

心配している彼の表情を見透かしたようにバーニスはそういうと床においてあった紫苑の荷物を取って肩にかけ、ソファーに寝ている彼を背負うと、右手に力を込め始めた。

彼女の力に答えるように、腕からは緑色の光が煌めき始め、一回指を弾くと、彼らの周りに凄まじい風が巻き起こる。

そして、竜巻のような強い風を巻き起こした後、彼らの姿は一瞬にして消えてしまった。

強い風に覆われて、紫苑は再び目を開けると目の前には古いアパートが建ち並んでいた。

外壁は長年、雨風に晒されて一度も葺き替え工事をしていないのか、良く言えばレトロ、悪く言えば古ぼけた、そんな建物であった。

彼女は彼と荷物を担いたまま、一階の一番奥の部屋へと足を進めていき、ドアの横にあるインターホンを一度鳴らすと、中から返事が聞こえ、ドアが開いた。

中から現れた人物は中年の男性で、歳のせいで薄くなった髪の毛が目立つが、何処か人当たりが良さそうな感じを醸しだしており、着ていた黄色のＴシャツがよく似合っている。

「こんにちは、ヨーゼフさん」

「バーニスちゃん、もう来たのかい？それよりそちらの方は……？」

「彼の名前はミカヅキ・シオン。今日からこちらに下宿させて欲しいのだが」

「……分かった。直ぐに鍵を持ってこよう。少し待っていてくれるか？」

彼女の表情を見て事情を察したのか、ヨーゼフは部屋の奥へと行き、鍵と必要な書類を持ってくると、近くにあつた魔方陣に乗り、持っていた鍵を真ん中に突き刺す。

彼らの身体は黄金の光に包まれて、瞬時に消え、光がやんだ頃には三階のフロアへと転移移動していた。

「さあ、こつちだよ」

案内されたのは白っぽいドアが特徴的な部屋だった。

中に入ると、定期的に掃除がされているのかフローリングの床には埃一つ落ちておらず、綺麗にワックスがかけられておりとても居心地が良い。

バーニスはヨーゼフから契約書と鍵を受け取り、背負っていた彼を床の上に下ろすと、直ぐ様具現化の力を使い、ベットを形成した。そこに彼を寝かせて布団を被せる。

「……すみません、ありがとうございます。此処は一体……？」

「此処は私が住んでるアパート先だね。泊まらせても良かったが、部屋が狭い上に荷物が散乱してるからちよつとな……。それに知ってる宛が此処しか無かった」

「そうなんですか。でも、いいんですか？ 大家さん、何も言わずに契約書置いて行っちゃいましたけど……」

「このアパートに住んでるのは沢ありの人間が多いからな。あの人

もそういうのには慣れてるんだろうよ。とりあえず……荷物は此処においておくからな。何かあったら、この無線機で連絡しろ」

彼女は彼の荷物を置きながら、それと、と彼女は一言付け加えて、寝ている彼の方へと振り向いた。

「リリアの事についてだが、あの女はあまり信用しすぎるなよ」

紫苑はその言葉に違和感を覚えたが、まだ身体の様子が辛く、そこまで深く思考出来なかった。

分かりました……と彼は弱々しく返事をする、直ぐに深く布団に潜る。

彼女はその姿を見届けて部屋を出ようとした時、あの……と後ろの方で呼び止められた。

「なんだ？まだ他にもあるのか？」

「今、此処の家賃のお金の手持ち持ち合わせてないんですけど……」

「

心配するな。ちゃんと組織から家賃手当が出る」

その様子にほっとしたような表情を浮かべて、紫苑は再び天井に視線を向けると直ぐ様眠りに落ちてしまった。

バーニスはその姿に安堵の表情を浮かべると、彼を起こさないようにそっと部屋を出ると、外で待っていた大家に頼み、部屋の鍵を掛けた。

第十一話

紫苑が目が覚めたのは次の日の昼前だった。

彼はベットから立ち上がると、水を飲むためにキッチンへと向かう。その時、郵便受けに何か入っているのを見つけた。

箱の中を覗くと一つの茶封筒が入っており、取り出して読み口を丁寧に破いて開ける。

中には一枚の手紙と地図、そしてこの国のお金なのか、大きなレンガ建物の建物が印刷された紙幣が二枚入っていた。

彼は折り畳まれた紙を広げて中身を読み始める。

文章は綺麗な字の日本語で書かれており、恐らく、前にリリアが言っていた特殊な紙を利用してゐるからそう見えるのだろう。送り主はバーニスからであった。

”今日は仕事に來なくていい。そのお金で何か買ってきた。二千ペイトあれば、今日のご飯ぐらい余裕で買えるはずだ。”

相変わらず、余計な事を書くのは嫌いなのか、簡素に書かれている手紙を見て彼は苦笑いを浮かべるしか無い。

一緒に添えられている地図を見る限り、赤く丸付けられている場所に行けばご飯を食べれる所があるようだ。

彼は紙とお金を封筒の中にしまつと彼女が昨日持つてきてくれた荷物を取り出す。

中には数点の服が入っており、紫苑は気に入った私服に着替えると、玄関に置いてあった家の鍵を取り上げ、きちんと締めたのを確認した後、目的の街へと歩き始めた。

今日はいつもより天気がいいのか少しばかり暑く感じる。

もう少し薄着の服を着てくればよかったか、と紫苑は若干後悔の念を浮かべながらも、地図を手に持ち歩き始める。

此処から赤印の場所はほぼ一本道であり、今、彼がいるミュー斯塔ットという町からはそう遠くはない場所にあるらしく袖口で汗を拭いながら目的の場所へと目指す。

川沿いの道を歩き、のどかな雰囲気の景色を眺めながら歩いていると土手の方から子ども達の声が聞こえてきた。

彼は進める足を止めて視線を向けるとそこには一人の少女と三人の少年が話をしていた。

「お願い、返して！」

白いワンピースを着こなし綺麗に整えた長い銀髪を靡かせた少女は涙を浮かべ、少年達の方へと視線を向けて声を上げた。

三人のリーダーなのだろうか、Ｔシャツにズボンを着た紫苑と同じ黒い髪の少年は、太陽に反射され綺麗に輝く青い玉の付いたネックレスを高く取り上げ、少女が必死に取ろうとするのを意地の悪い表情を浮かべて愉しそうに見ている。

他にいる金髪の少年と天然パーマが特徴的な少年も彼女の姿を見て一緒に笑っているようだ。

「返して欲しいか？」

リーダー格の少年はネックレスを上高くぶら下げたままそう言うのと彼女は頷く。

少年はネックレスを渡そうとするが、彼女の手が触れる寸前に直ぐに手を引っ込めると、川の方へ投げ込んだ。

少女は小さな悲鳴を上げて大きく泣き崩れるとその姿に少年達は大きく笑い始めた。

だが、この時、川の水面は大きく揺れ始めており、彼らの内の一人が異変に気がついた。

「お、おい、グロッサム見ろよ！」

グロッサムと言われた黒髪の少年は金髪の少年が指をさした方へと見ると、目の前に起こっている光景に笑いを止め、表情を固まらせた。

彼らの目の前には水の透明感が溢れる巨大な蛇が佇み、こちらを睨んでいた。驚くのも無理は無いだろう。

少年たちは叫んで腰を抜かすが当の蛇はこちらに近づいて、巨大な舌を差し出し彼らの頬を一回舐める。

少年達は今にも失神しそうな表情を浮かべて恐怖のあまり涙を浮かべていると、彼らの背後から男の大きな怒鳴り声が聞こえた。

「お前ら、女の子を泣かして何が楽しいんだ！ちゃんと謝らないとこの蛇に食われるぞ！」

チエツクの長袖にジーンズを履いた紫苑は彼らの後ろでそう言い放つが、無論、嘘に決まっている。

しかし、懲らしめるのには丁度良かったのか、少年たちは直ぐに銀髪の少女に駆け寄り、ごめんなさい！と頭を下げるとそばにある階段を駆け上がり、何処か違う場所へと逃げていった。

その様子を紫苑はため息を漏らしながらも少女の元へと近づいていく。

当の彼女は一体どういう事になっているのかと呆然とした表情を浮かべて立ち尽くしている。

「大丈夫か？」

彼女の目線にあわせて紫苑はしゃがんで声を掛ける。

大丈夫、と一言答える彼女だが気を取り戻したのか先ほどと同じく涙を浮かべた表情へと変わりだす。

「あのネックレス、お母さんの形見なのに……！」

泣き出す彼女に紫苑は持っていたハンカチで少女の涙を拭いてあげて持たせると彼女に背を向け先程創りだした巨大な蛇の元へと近づいた。

彼は蛇に、ネックレスを探してきてくれ、と一言言くと巨大な蛇は川の中へと潜り始める。

意外に落ちた場所が近かったのか、蛇は直ぐに川から顔を出して、彼の元へと戻り舌を出した。

蛇の舌には先程の青い玉のネックレスがあり、彼はそれを受け取り、お疲れ様、と言つて、具現化を解くと、少女の元に戻る。

「これでいいのか？」

紫苑は彼女に見せて確認した後、首元にネックレスと取り付けてあげる。

銀髪の少女は笑顔を見せ、戻ってきたネックレスを持つと愛おしそうに見つめた。

「ありがとう！お兄ちゃん凄いね！」

先ほど紫苑がやった具現化に感動したのか少女は興奮した様子で彼を見つめる。

彼は何処か照れくさそうに表情を浮かべるが、直ぐに表情を戻すと彼女の頭を撫でた。

「それ、もう無くすんじゃないぞ」

「うん！」

少女は元気よく返事をし、再び紫苑にありがとう、と一礼し土手の階段を駆け上がると近くの路地へと足を進めていった。

彼はその姿を微笑ましく見届け、大きく息を吐き出す。

そして、先程彼女が駆け上がった階段を上ると、ポケットから地図を取り出し、目的地に向かって歩き始めたのだった。

第十二話

歩き始めて二十分。

途中で寄り道してしまったため、予定より少し遅くなってしまったが、当の紫苑は特に急ぐような用事も無いのであまり気にしていない。

彼がついた場所はアルベルトという昔ながらの街並みが特徴的な商店街だ。

丁度お昼時と被ってしまったのか、人々と共に多くの露店や飲食店がひしめき合っていた。

少し身を捻るか何かしないと前には進め無いほどの人数であり、この場所が繁盛している事がよくわかる。

入り口から割と近い野菜屋で目当ての食材を買う者や、作業服に身を包んだまま、仲間と数人で飲食店で食事を摂っていたりする者達の姿を横目に歩きながらも、紫苑は一つ一つ露店や飲食店を見比べて、今日の昼食を摂る場所を考えていく。

そして、一つの飲食店に目をつけると通りにいる人をかき分けて店のドアを開けた。思っていたより人が少ない。

「いらっしゃいませ」

栗色の髪を束ね素朴な黒と白のエプロンドレスに身を包んだウェイトレスは紫苑の姿に気がついたのか、空いている席に通すと彼はそこに腰を掛けた。

彼は手渡されたメニューを開くが、困ったように顔をしかめる。

「……読めない」

この国の言語なのかドイツ語と英語が混じったような文章を見て彼はため息を付くしか無い。

そういえばあの特殊な紙は高くてあまり一般化されていないと、前にリリアが言っていたことを彼は思い出すと、仕方なしに先程のウェイトレスを呼んだ。

茶色い伝票を持って注文を聞こうとしている彼女に彼は一言聞く。

「この店のお勧めは何ですか？」

「お勧めでしょうか？それならば、こちらのメニューがお勧めですよ」

ウェイトレスは嫌がる素振りも見せず、彼が持っていたメニュー表に人差し指を差し出す。

彼女が指したその先には、複数の野菜が挟まれた彩り豊かなホットサンドの写真が写っていた。

「こちらは店内で一番人気のホットミックスサンドですよ。セットとしてドリンクとハッシュドポテトが二枚ついていますがいかがですか？」

じゃあ、それにします、と紫苑は一言答えると、彼女は伝票に書き込み、厨房の奥へと消えていった。

——意外にも料理が出てくるのは早かった。

恐らく店に入ってから十分も掛かっていないだろう。

ウェイトレスは厨房から白いお皿に乗ったホットミックスサンドとハッシュドポテトとドリンクを持参し、彼のテーブルに置いた。

渡されたフォークとナイフを取り、彼はミックスサンドを切り

分け口に運ぶと彼は驚いた表情を浮かべ、目の前にある料理をまじまじと見つめた。

（——美味しい！こんなに美味しいホットサンド食べたのは初めてだ！）

焼いているのにも関わらず、野菜の歯ごたえはしっかりしており、美味しい。

また、中に入っているチーズの味も濃いものにも関わらず全くしつこくなく、紫苑は思わずハイペースで料理を口に運んだ。

彼はものの数分で平らげると、幸せそうな表情を浮かべて、窓の外を見やる。

そして食後のコーヒーを飲んで一息つくと、テーブルの上に置いてある茶色い伝票を取り、レジの方へと歩いて先ほどのウェイトレスに手渡した。

しかし、この時彼は思いも寄らない出来事に驚きを隠せなかった。

「ホットミックスサンドのセットで……二千ペイトになります」

「渡されたお金、全部使っちゃったよ……」

店を出て紫苑は大きく息を吐くと、近くにあったテイクアウト用の食事スペースの椅子に腰を下ろした。

あの店はサンドウィッチ専門店でも高い事で有名な店らしく、彼は驚きと落胆を隠せない。

「通りで人が少なかった訳か……。まあ、値段相応で美味しかったからいいか……」

彼は気分を切り替え、腰を上げると、帰宅するために先ほどとは逆方向の道へと歩き始めようとした。

だが、その時奥のほうから数人の大きな悲鳴が上がった。

何事かと思い、紫苑は声のした方に視線を向ける。

人々が突然の出来事に狼狽えているその中で、一人の黒い服に包まれた死神は辺りの人々を睨みつけながら、一人の銀髪の少女を抱き抱えていた。

紫苑はその抱えられている少女の姿に、あつ、と思わず声を漏らす。抱えられていたのは、先程、川沿いで出会ったあの少女だったからだ。

彼は直ぐにその者の側へと近づこうとしたが、気配を察知してか、敵は物凄いスピードで彼女を抱えたまま逃げ出す。

「逃がすかよ！」

紫苑はそう捨て吐くと、近くにあった樽ほどのサイズのバケツの中の水から剣と大きな鳥を生み出した。

彼の身長ほどに作られた鳥は紫苑を乗せると、大きく羽ばたいて敵を追い始める。

敵は商店街を抜けだすと、幾つもの人気の無い路地を通り抜けて、彼を攪乱させようとするが、水鳥に乗った紫苑は徐々に敵との間隔を詰めていく。

その姿を面白くなさそうに黒い者は舌打ちしすると、すぐ目の前迫っていた壁を使い、身体を急上昇させる。

恐らく、壁にぶつからせ、彼のコントロールを失わせてから追手を振り切る狙いだったようだが、黒い者に続き、紫苑も身体を上昇させて追いかける。

これ以上、振り切りを行なっても無理と感じたのか、敵は近くの山の中へと入ると、高度を落とし、地面に足をつけた。そして、少女を抱えたまま走りだすと近場の藪へと身を隠す。対する紫苑も高度を下げ、敵を追うが、木々が生い茂っているこの場所では直ぐに敵の姿を見失ってしまった。

（クソッ——、何処へ行った!？）

乗っていた水鳥の具現化を解き、辺りを見渡すが、緑豊かに生えている草木しか見当たらない。

剣を構え、前に足を進めている彼に、一瞬、何か違う力の気配を感じた。

振り向くタイミングが一步遅かったのか、彼の身体は何らかの強い力を受け、吹き飛ばされた。

木々の枝で擦れた痛みに耐えながら彼は立ち上がると、目の前には自らの腰に掛けてあった鋼鉄の剣を取り出し、少女の首元に突きつけていた敵の姿が目に入った。

「その子を返しやがれ!」

そう叫んだ瞬間、紫苑の中で何か違う感情が蠢き、一瞬ながらも彼の髪の毛が赤色に変化した。

彼も自身の先ほどの感覚に戸惑いを向けながらも、敵を睨み続ける。敵はその姿に何か気がついたように、視線を向け、ニヤリと笑みを零した。

「ほう……。貴様だったのか」

「なっ……。！死神が喋った!？」

本来、死神は生者の魂を勝手に刈り取る為、己の魂には感情はないはずだ。

驚いている紫苑をよそに、死神は満足した表情でこちらに視線を向け言葉を紡ぎ始める。

「私ぐらいのランクになると、死神でも感情が芽生えるのですよ。

——最も、その感情は魂を刈り取る喜びと憎悪しかありませんがね。しかし、此処に来て思わぬ収穫が手に入るとは……」

不気味に死神は笑い、右手を上に掲げると何らかの黒い空間から等身大の鎌を取り出した。

その鎌は以前退治した死神の物よりも数倍赤く輝いており、武器全体から憎悪と狂気に満ちていた。

恐らく、憎悪は刈り取られた魂の感情、狂気は現在の死神の感情を表しているのだろう。

余りにも強い力に紫苑の背中から冷たい汗が滴り落ちる。

「あなたは見る限り、水の使い手のようだ。しかし、此処には水は無い……。四元素の使い手の最大の欠点は己の触媒となる元素が無いと術を発動できないと言う点だ。さあ、どうします？」

黒い者がそう言った瞬間。

彼女を抱えたまま、赤い鎌は紫苑に向かって振り降ろされた。

軽く振るったのにも関わらず、鎌の先からは黒い衝撃波が繰り出され、紫苑は持っていた剣の具現化を解いて盾に変える。

まともに受けた盾は大きく音を立てながら攻撃を防ごうとするが、元の素材となる水が少なすぎたのか、激しく音を立てて崩れると再び彼は吹き飛ばされ攻撃を受けた。

「っー」

彼は咳き込みながらも腰に掛けている銀の剣を使って立ち上がり、敵に向かって走りだす。

紫苑の剣は黒い者の鎌と重なりあうが、威力が違いすぎるのかあつという間に押し切られてしまう。

その様子に抱きかかえられていた少女は、やめて！と敵に叫ぶが、その言葉に敵は耳を貸そうとはしない。

「もう終わりですか？本当に、触媒がないと何も出来ないんですね」

黒い者は冷たく紫苑を見下ろすと、首元に鎌を突きつける。

触媒となる水がない紫苑には具現化をし、武器を作ることままならない。

悔しそうに見つめる彼に黒い者は満足した様子で視線を向けた。

「私の武器の血となりなさい！」

黒い者は赤い鎌を振り上げ、彼に向かって切り裂こうとする。

抱えられた少女はその姿を見て「やめてえええええ！」と涙を浮かべながら大きく叫んだ――。

第十三話

「な……くっ！」

持っていた鎌を振り下ろそうとした死神は突如苦しみ始めた。身体には数本の透明感溢れる槍が数本突き刺さっている。

一体何が起こったのだろうか、と紫苑は身体を起こして視線を向けると、死神に抱えられていた少女の身体に異変が起きていた。

胸にある青いペンダントは彼女の身体を包み込むように光っており、その玉の中から再び槍を出現させる。

死神は避けようとするが、先ほどの攻撃で動きが鈍っているせいか、投げられたうちの何本かは黒い者に突き刺さった。

「おのれ……！」

黒い者は怒りに満ちた表情を浮かべ、少女に鎌を振り下ろそうとする。

だが、紫苑は当たりそこねて落ちていた槍を一つ取り、素早く具現化させて大剣に変えると彼女の元へと踏み込み、間一髪で攻撃を防いだ。

「やつぱりな……。あの光を見た時もしや、とは思ったが……この素材の原料は水か」

此処がチャンスと言わんばかりに大剣を振りかざし、鎌の攻撃を弾く。

先程は互角以上の力であった死神の力は弱々しく跳ね返され、まともに攻撃を受けて倒れこんだ。

彼はトドメとばかりに、敵に剣を突き刺すが、攻撃が当たる寸前に、

敵の身体は一瞬にして消えてしまう。

ギリギリの手前で瞬間移動テレポートの術らしき物を発動させて逃げたようだ。その様子に紫苑は舌打ちをし、苦々しい表情を浮かべる。

「ちっ……。逃げられたか」

敵を追いたい気持ちは山々だったが、今は少女の事の方が心配だ。彼は倒れ込んでいる少女の元へと駆け寄る。

「大丈夫か？」

「あつ、あの時のお兄ちゃん……」

少女の表情はまだ怯えており、よほど怖かったのだろうか近づいてきた彼の腕にしがみついて来た。先ほど光っていた青い玉のネックレスは光を失いくすんだ色と化しているが、見たところ外傷はなく、どうやら大丈夫なようだ。

「もう、大丈夫だからな。一緒にお家に帰ろうか」

うん、と少女は頷くと彼は少女の左手を取る。

そして、空いている右手で行きの時に乗っていた水鳥を具現化させ、二人は乗り込むとアルベルト商店街へと戻っていった。

一方、商店街では死神が出現したということで人々は混乱に陥っていた。

警備隊も出動され、人々の混乱を鎮圧させようと必死である。お昼時でなおかつ、人の密度が高いだけにその作業の苦労も計り知れない。

い。

ようやく、落ち着いたのは事件が起こってから三時間ほどしてからだ。

入り口と出口に関係者以外立ち入り禁止のテープを張り、警備隊が作業をしているその中で、風の使い手であるバーニスも彼らに混じって現場検証と聴取作業を行っていた。

「すみません。私はアルトウー口特殊魔術師のバーニスというものです。今回の事件当時の状況をお聞きしたいのですが」

そう言っつていつも持ち歩いている証明書を見せる。

彼女が声を掛けたのは、近くの軽食専門の露店の店主だった。

人々が混乱に陥り、聴取を断る中で、男性は片付け作業を行いながらも二つ返事で聴取に応じてくれた。

バーニスは胸ポケットから手帳を取り出すと話を聞くためにメモを取り始める。

「当時の事件状況ね……。僕がサンドウィッチをお客さんに渡そうとした時、突然、死神が現れたんだよ。一瞬の動きで、ちょうど、店の前に居た綺麗な銀髪の少女の身体を取って逃げようとしたんだ。ただ、その時にある少年が死神に向かって走ってきてね。逃げたのを見ると、近くにあったバケツの中から剣と水鳥を引っ張り出してすぐさま追いかけていったよ。ありや、凄かったな。生きてて六十年、あんなに具現化させる四元素術師がいるとは思わなかったよ」

「なるほど……。死神を追った少年が居たのですか。その少年の特徴を教えてくださいませんか？」

「確か、十七、十八ぐらいの年齢の男の子だったな……。後、綺麗な碧眼と薄い青い髪の毛が特徴的だったな。遠くから見てもよく目

立つ風貌だったからよく覚えているよ」

その時、彼女のペンを走らせる手が止まり、何かに気がついたような表情を浮かべる。

そして、すぐさま、持っていた無線で何処かに連絡をしようとした時、上空から何か大きな物が飛んできた。

彼女は持っていた手帳とペンをポケットの中へ戻すと、刀を具現化させて構えた。

だが、降りてきたのは透明感溢れる大きな水鳥で、そこには薄い青い髪の少年と銀髪の少女が乗っていた。

少年は彼女を地上へ下ろすと、自らも続いて下に降りる。

そして、右手を水鳥にかざすと、少年の髪は黒色に戻り、大きく作られた鳥は一瞬にして消え失せて地面には小さな水たまりが出来た。

「——やはり、シオン、お前だったか」

構えていた刀を下ろすと、彼女は紫苑の元へと近づいていく。

彼も近づいてくるバーニスに気がついたのか、そちらに向かって軽く手を上げて振った。

「無事、女の子は助け出しましたよ。いや、あの死神は以前のに比べて強くて——」

「お前は馬鹿か！そのぐらいやばい事件なら私に一つぐらい連絡しろ！つたく、まだ本調子じゃないのに無理すると身体に障るぞ！」

「す、すみません……。咄嗟に身体が動いてしまったので……」

大声で怒鳴られ、紫苑は小さく身を縮めた。

それより、と彼女は再び彼の方を向いて言葉を紡ぎ始める。

「——さっきの大きな水鳥はシオンが作ったのか？」

「ええ。その方が移動が楽ですし」

そう答える紫苑に彼女の表情はますます訝しげな表情へと変わっていくばかりだ。

その表情に彼は不安を隠せない。

「どうかしましたか？」

「変だな。四元素術師は『物』を具現化出来るが、さっきみたいに動物を具現化させて操ることができるなんて聞いたことがない」

「えっ？でも、バーニスさんも前の死神討伐の時、風で操っていたじゃないですか」

「あれは周りに張った風の力の強弱を変えながら進めていけるんだ。投げナイフも追い風の力を圧縮させて飛ばしてるしな。私の自らの意思で具現化させた『物』を動かすことはできない」

紫苑は驚きで言葉が出なくなる。

先ほどやった彼がやったあの術は、通常のではないらしい。

「じゃあ、さっきやった俺のアレは……？」

「何だろうな。多分違う物だと思う。さすがに私は通常使われる魔術関係は基礎的な事しかわからないからな。詳しい人が居れば別だろうが——」

「あ、あの！」

紫苑の後ろに隠れていた銀髪の少女は声を上げた。
何事かと思い、二人は彼女の顔を見合わせる。

「もしかしたら、私のおばあちゃんなら何かわかるかも」

少女曰く、彼女の祖母はこの地域で有名な魔術占いを行なっている人物で、ほとんどの確率でよく当たると評判の持ち主らしい。
また、職業柄、ほとんどの魔術知識に精通しているらしく、時たま、魔術グッズを作っではこのアルベルト商店街で販売を行なっているのを少女も手伝うようだ。

話を聞く限り、紫苑は占いにはあまりいい考えを持っていないらしく、終始胡散臭い表情を浮かべていたが、対するバーニスの方はその事を聞いて表情を一変させる。

「魔術占い……。まさか、貴女はカロリーヌ・ベネッタの孫か？」

「うん、そう……。私はエミリー・ベネッタ。お姉ちゃんの言うとおり、カロリーヌ・ベネッタは私のおばあちゃんの名前だよ」

二人の間で話がどんどん進んでいくが紫苑は全くわからない。

何らかの事情を知っているバーニスに彼はどういう事なのか問いた
だした。

「なあ、その、カロなんとかっていう人は有名なのか？」

「ああ。この辺じゃ有名な占い師だよ。名前を知らない人は居ないんじゃないかな。ただ、住んでいる場所はシークレット扱いだね。

いつもこの近辺にやってきては占いやグッズを売って、仕事が終わると、瞬間移動テレポートを使って人に場所を悟られないようにして帰るって
いう不思議なステータスを持つてる人なんだよ」

「へえ……。でも、そんな人の住所ってわかるわけ無いだろう？」

その点は大丈夫、と少女・エミリーは一言、彼に言った。

「私が知ってる。それに、移動術式は特殊だから、たとえ私が持つて
るこの紙の術式が奪われても私の精神と血がない限り発動しない
ようになってるから」

「そうか……。どうせ、護衛のためにもエミリーを送って行かなきゃ
ならんしな。いいチャンスかもしれない」

紫苑がそう言ったのを確認すると、エミリーはある何らかの術式が
書きこまれた紙をポケットから抜き出す。

じゃあ、今から行くよ？と彼女は彼らに言つと、自らの指先から出
た血を紙に数滴つけて手のひらを置くと目を瞑り始める。

すると、目の前の彼女から淡い光が発せられ、彼らが一瞬、眩しい、
と感じた頃には、既にアルベルト商店街から姿を消してしまってい
た。

第十四話

三人が再び目を開けた頃には木々にあふれた小道にたどり着いており、エミリーの指示に従い、綺麗に作られた専用の道を真っ直ぐと歩き進めていく。

体感時間で数分ぐらいだろうか、生い茂る草木を掻き分けて三人は歩き進めると、目の前に大きな屋敷が目に入った。

古く趣があり、質素ながらも上品な造りの建物で、紫苑が最初に来た広場にあつたレンガ造りの建物よりも大きいだろう。

彼女は玄関にある鉄の柵に手をかける。二人もそれに続いて玄関に足を踏み入れた。

「ダミーだな」

こちらに来てからずっと黙っていたバーニスはそう呟いた。

隣に居た紫苑はその真意が理解出来なかったため、彼女に問い返す。

「ダミーってどういう事ですか？」

「そのままの意味だよ。この建物は幻術を使って本当の建物の姿を隠している」

「まあ、良くわかったわね」

突如、彼らの後ろから声が聞こえた。

振り返るとそこにはいかにも占い師らしいコートを羽織った初老の女性が籠を持って立っていた。

籠の中には占いで使うのか瓶に入った聖水と色とりどりの薬草が多く詰められている。

エミリーは彼女の姿を見るやいなや、すぐに駆け寄っていった。

「おばあちゃん！そこにいるんだったら、声を掛けてくれたらよかったのに」

「いや、ちよつと別次元の所で魔術に使う薬草と聖水を取ってこようと思って今戻ってきたところなのよ……。ところでそちらの二人は？見たところ、水の使い手と風の使い手の二人みたいだけど――」

「な……！」

咄嗟に自らの能力を言い当てられ、紫苑は困惑を隠せなかった。

「まあ、紫苑は直ぐにわかりやすいとして……。なぜ、私が風の使い手だと分かった？」

今の紫苑は女性が持っている聖水に反応しているのか瞳だけが碧眼に変化していた。

彼の姿を見たバーニスはそれに気がついたのだろう。

女性は彼女の問いに答えるため、そのまま話を続ける。

「このダミーの建物とわかる理由はただひとつ。建物の周りにある僅かな風の動きの違いのみ。さすがに幻術を使っても風の動きだけは似た様な雰囲気ではしか誤魔化すことはできない。それに気づくのはいつも風を利用して生み出してる四元素術師の中の風の使い手のみだからね」

「さすが、魔術に詳しいだけあるな」

感心したようにバーニスは軽くため息を付いた。

まあ、お話は中に入ってからにでもしましょうか、と女性は言々と彼らを玄関先へと案内する。

ドアを開けるとそこには大きな部屋が広がっており、高価そうなアンティーク物や家具が並べられていた。

初老の女性は籠を机の上に置いて、彼らをソファアの所へ進めると客人の準備をするためにティーセットを取り出した。

渡されたティーカップに口をつけて啜り、彼らが一息ついたのを確認すると女性は話を紡ぎ始める。

「今さつき、エミリーから聞いたわ。死神に襲われたところを助けてくれた、と。そして、あなた達二人がアルトウーロの特殊魔術師だということも聞いたわ。孫を助けてくれてありがとう」

彼女は上品に礼をした。

バーニスはカップを持ったまま、助けたのは隣にいるシオンですけどね、と答えると女性は下げていた頭を上げた。

「そうだったの……。そういえば、自己紹介がまだだったわね。私はカロリーヌ・ベネッタ。この近辺で魔術占いで生計を立てているわ」

女性——カロリーヌに倣い紫苑達も軽く自己紹介を行うと、バーニスは先ほど紫苑が行った術に関しての事を話し始めた。

一通りの話を聴き終えたカロリーヌは彼らを見据えて考えこむと直ぐに立ち上がる。

「じゃあ、少し私に見せてくれない？ シオン君だったかしら、ちょっとこちらに来てくれる？」

はい、と紫苑は頷いてカロリーヌの元へと近づく。

カロリー又は空中で何らかの印を結ぶと彼女の真横から大きな空間が出来た。

彼女はそれに足を踏み入れながら、ソファアーに座っているバーニスに向かって話を始める。

「此処では水資源があまり無いから……今から彼と二人で特殊空間に行って確認してくるわ。少し待っててもらえるかしら？」

ええ、分かりました、と座っているバーニスはそう答えたと空間の中へ入っていく彼女を見つめた。

そして、彼らの身体がすべて入ると、空いていた空間はすべて閉じ、何事もなかったかのように消えてしまった。

彼らがついた先は大きな滝が佇んでいる場所であった。

辺りには草木や花が生えておりその風景は何処かお伽話に出てくる庭園の空間のように見える。

「ここで何か具現化させてみて？」

カロリー又は紫苑を滝の元へと案内すると能力を使うように求めた。彼は言われたとおり、滝のそばへ近寄ると目を瞑り、右手を伸ばす。紫苑の力に答えるように、水は大きく波を打つと徐々に姿形を変えて巨大な龍が形成された。

水龍は彼の意思に答えるようにこちらに近づくと頭を下げた。

そして、彼が龍の背中に乗ったの確認すると水龍は大きく羽ばたき、空を駆け抜けた。

暫く空を駆け抜けた後、彼の指示に従って麓へ下ろすと同時に具現化の力を解いた。

「どうでした？」

いつもより上手く術の調整が出来たのか紫苑の表情は嬉しそうだった。

だが、それを見たカロリーヌの表情は何処か険しい。

「……やっぱりこの術は四元素術ではないんですか？」

不安になった紫苑はカロリーヌにそう一言呟くが対する彼女は否定する。

「いえ、元になつてゐる術は四元素術で有ることは間違い無いわ……。私が見る限りでは、四元素術に幻術が加えられた感じがしら」

「幻術って物を操ったりできるんですか？」

「元々、幻術は自らを欺くために作られた言わば、分身の術みたいなもの。自らの精神の一部を他のものに上乘せして操る術なのよ。普通の魔術と毛色が違う四元素術では使えないはずなんだけど……珍しい出来事もあるのね」

彼女はそう言うと、そろそろ戻りましょうか、と彼に一言言い放つ。

「もういいんですか？」

「ええ。大体の状態は分かったから。バーニスさんの元へ戻りましょう」

カロリーヌはそう言うと再び大きな空間を作り出す。

彼らはその穴の中に入ると元の部屋へと戻っていったが、その時の彼女の表情は終始厳しいままだった。

第十五話

彼らが戻ってきたのは体感時間で十分程度の事だった。

意外に早かったな、とバーニスは思いつつも戻ってきたカロリーヌに対して問いただす。

「どうでした？」

「ええ。彼は四元素術をベースにして幻術を組み合わせさせてやってたみたい」

「幻術を……？」

バーニスは訝しげな表情を浮かべるが、彼の術の要因が分かったかなのかそれ以上の追及はしなかったが、対するカロリーヌは厳しい表情を浮かべている。

「どうかしました？」

カロリーヌはハッと何か気がついたように、バーニスの顔を見やつた。

余程考え込んだ表情を浮かべていたのだろうか。

彼女はバーニスに大丈夫よ、と一言言っつて、隣に居た紫苑にソファへ薦める。

「ちょっと、物を取ってくるわね」

カロリーヌはそう言つと、自らの部屋のドアを開けると中に入つていった。

彼女の部屋は書斎となっており、たくさんの蔵書や魔術関連の資料などが棚に並べられていた。

カロリー又はそれらが積まれた本棚の前を通ると、書斎にある引き出しからある一つの物を取り出す。

彼女の手に掲げられていたのは黒いブレスレットだった。

特殊な石が利用されているのか、紐を通して並んでいる石は黒く鈍く光っている。

（まさか、こんな事が起こるなんてね……。これ以上彼を目覚めさせてはいけない——）

そう思考を巡らせた彼女は引き出しを閉めて、黒いブレスレットを軽く握ると直ぐにドアを開けて彼らの元へと戻ってきた。

「ごめんなさいね、少し探しものをしていたので」

それでね、とカロリー又はソファアの上に座っている紫苑の元へと近づいた。

彼女は紫苑にちょっと手を出してくれないかしら？というのと、彼はいいですよ、と言って右手を差し出す。

そして、カロリー又は手に持っている黒いブレスレットを紫苑の右手首につけた。

「何ですか、これ？」

彼が訝しげに思うのも無理は無いだろう。

カロリー又は彼の手に嵌っているそのブレスレットについての説明をし始めた。

「それはね、幻術の力を引き出すブレスレットよ。力の制御もしや

すいように改良してあるわ。これからのシオン君には必要な物だと思うの。あまり己の力を過信して使いすぎないようにね？」

カロリー又はいつもの表情に戻すと彼に向かって微笑んだ。

質問の真意がよくわからなかったが、紫苑は、分かりました、気をつけます、と言うと、腕についているブレスレットをまじまじと見つめる。

バーニスも彼の腕についているそれを見つめながら、自らの腕についている時計を見やると既に時刻は夜時を迎えていた。

「もうこんな時間か……。そろそろ私たちはお暇させて頂きます。ありがとうございました。シオン、帰るぞ」

わかりました、と紫苑は言う。とバーニスと共に立ち上がった。

そして、カロリー又には玄関まで誘導され、靴を履き、着ていた服を整えると彼女に一礼する。

「じゃあ、失礼します」

「ああちよつと待つて……」

カロリー又は何かを思い出したように懷から二枚の紙を取り出した後、その紙に何らかの呪文を唱え、紫苑たちに一枚ずつ渡す。

先ほどの術によって何らかの術式が書きこまれたのか、楕円形の中に紫苑の読めない文字でたくさんの言葉が立ち並んでいた。

「それで元の場所に帰れるはずよ。それぞれの術式にはあなた達二人に反応する特殊術式を組み込んであるから、通常魔術が使えなくても、四元素術の能力を使えば帰れるわ。また、今度、遊びにいらつしゃいね」

微笑むカロリーヌの横でエミリーは手を振りながら彼らを見送る。紫苑達は彼らに背を向け、貰った紙に能力を込めると、彼らの力に反応して淡い光が輝きはじめる。

そして、光の度合いが最大になった瞬間、彼らの姿は一瞬の内に消えてしまった。

消えた彼らを見送ったカロリーヌは先程の微笑とは一変し、心配した表情へと変わった。

（あれ以上、力を引き出したら彼自身の身に危険が及ぶわ。あれが壊れない限り、力は制御されているから恐らく大丈夫だと思うけど――）

カロリーヌは再び考えこむ。

その厳しい表情に不安を感じたのか、エミリーは彼女の顔を見やっ
て心配そうな表情を浮かべた。

「おばあちゃん？」

「ん？ああ、大丈夫よ。さて、今日は……シチューにでもしまし
うか」

うん！とエミリーは元気よく答えると、カロリーヌと手を繋ぎ、仲
良く玄関先へと戻っていったのだった。

第十六話

彼らの世界とは対照的に広がる黒い空。

その中で光る月の色だけは変わらず、岩場の方で、肩を押さえて息をしている男にとってはいつもの光景であつた。

此処は死神界と外界が跨る狭間の場所であり、多くの死神はこのルートを通つて、人間界の住む外界へと足を運び、魂を食らっていく。そして、その魂は己の物とすると共に、一定の量を集めるとこの世界を治める魔神に認められ、一人前の死神となれるのだ。

しかし、死神の男は下界で受けた傷が癒えないのか辛そうに息をしながら、座り込んでいる。

「やはり……四元素術は死神にとっては致命的な欠点なんですね……。力が出ないのと同時に魔神様の加護を受けていてもなかなか痛みが引かない」

通常、死神は欠点である四元素術を受けると即座に消滅してしまうが、赤い鎌を持った死神はある程度の攻撃に耐えうる事が出来る。特に彼のように赤い鎌を持ち、なおかつ魔神の加護を受けた者は大量の攻撃を与え続けられない限り、消滅することはないが、元々の弱点を消すことは出来ずに痛みだけが残ってしまう。

「しかし、あの者を見つけるとは思わなかった――。今は封印されているのだろうが、彼の中の物が目覚めるのも時間の問題だろう。直ぐに魔神様に相談しなければ」

男は一息ついて、すぐに地面に手を置いた途端、彼の周りに魔方陣が生み出された。

地に付いている手に力を込めると、彼の中で生み出される魔力は反

応し漆黒の霧に包まれると同時に男の姿は消えてしまった。

次に男がついた先は黒い大きな塔が経った場所であった。

門は嚴重に施錠されており、二人の死神の門番が見張っている。

姿に気づいた門番はすぐに扉を開けると、男はその先にある広く長く続く暗い階段を登り始めた。

そして、長い階段を上り詰めた先には、赤く長いコートを羽織り黒い長髪を整え、冷たい瞳で見下ろした長身の男が椅子に座り込んでいた。

男はその姿を見つけると、膝について頭を下げた。

「魔神様、ご報告がございます」

「ほう……何かね？」

「我ら死神界の切り札となりうる逸材を見つけました」

その言葉に先ほどの魔神の冷たい表情とは一変し、興味深い表情へと変わる。

「切り札だと？」

「ええ。精霊神に太刀打ち出来るチャンス日ももう近いかと」

「その話を詳しく聞かせろ」

はい、と男は答えると下げていた頭を上げ、立ち上がった。

「その者は四元素術師ですが……。どうも違った毛色を持っているようで。そして、その者にはもう一つの力が宿っているようです。その者とその者自身の中に眠っている力を我ら死神界で飼い慣らせば、精霊界と下界を征服できるのも時間の問題かと……」

部下の話を聞くと魔神は大きく笑い始める。

その態度に、男は緊張するが、対する彼は不気味に笑みを零すだけだ。

「なるほど面白い。四元素術師と聞くと、十八年前のあの日を思い出すが……。敵となるものを操ってこの世界を征服するのも悪くはないな。——話は分かった。お前にはこれを授けよう」

魔神は手をかざし、大きな黒い空間から何か大きな物を取り出した。彼は持つている鎌を目の前にいる男に手渡す。

「魔神様、これは……?」

男に差し出されたのは、彼と同じぐらいの大きさの黒い鎌だった。薄暗い光に当てるとその鎌は鈍く光り、今か今かと獲物を待っているようにも見える。

彼は鎌を手にとると、己の中から何らかの力が湧いてきたのか、激しい憎悪と死神としての狩る喜びが同時に溢れでてきており、いつもより体が軽く感じた。

「それは、黒い鎌だ。ブラック・ヘルサイズ特殊な四元素術師を相手にすると今持つている赤い鎌でレッド・ヘルサイズ飼いなすのは難しいだろう。これでお前の身も守ってくれる。良い報告を期待しているぞ」

「あ、ありがとうございます!」

男は嬉しそうに頭を下げて引き下がると、持っている鎌を自らの空間へ放り込んだ。

そして、彼の方を振り返り、一礼すると、登ってきた黒い階段を一步步ずつ降りていく。

その姿を見届けた魔神は先程の表情とは一変し、憂いの表情を浮かべて何処か遠くの方を見やった。

（これで——リリアを手に入れるのに一歩近づく、な……）

カロリー又から貰った移動術式を使って移動した紫苑達は自らが住むアパートへと戻っていた。

既に時刻は夜を迎えており、辺りでは魔術を利用した電灯がチラホラと付いている。

「じゃあ、今日はこれで仕事終わりと言う事で。私は組織に報告してくるから。シオンは先に帰ってていい」

そうは言われても先輩より先には帰りづらい。

いえ、一緒に行きますよ、と紫苑は言うが、対する彼女は別にいいから休んどけ、としか言わない。

「分かりました……。じゃあお言葉に甘えて、お先に失礼します」

バーニスに一礼し、アパートの玄関にある移動用の転送方陣に手をかけると彼の姿は一瞬にして消えてしまう。

彼女はそれを見届けると、すぐさま風を纏い、本部があるセリノの街へと飛んでいった。

一方、アパートへ帰宅した紫苑はベットのの上に横になりため息を付いた。

前よりかは能力を操ることに慣れてきたのか、そこまで身体的負担はなくなったが、今日一日で色んな事がありすぎて少し疲れてしまったらしい。

彼はベットから立ち上がろうとすると、勢い良くお腹が鳴った。

「そういえば、もらったお金、全部無くなっちゃったんだよね……」

昼間賑わっていたアルベルト商店街は事件の影響で昼以降は臨時休業としてしまったらしい。

バーニスから他に食べる所を知らされていない彼はどうにもするごとなく、ベットの上で寝転ぶしか無い。

はあ……とため息を付いていると、突然、部屋の中でインターホンが響き渡った。

ドアの窓を覗いてから扉を開けると、バーニスが何らかの袋を下げて立っていた。

「早かったですね……。それは一体……？」

「今日の夕飯だ。シオンにはアルベルト商店街しか場所教えてなかったし……。それに、お金全部使ったんだろっ？」

図星の問いに、紫苑はうつ、と言葉を詰まらせた。

「なんで分かったんですか？」

「わかるも何も、その余所余所しい態度見てたらなんとなく検討はつくさ。まあいい、今日の夕食は出来合い物だけど、これでいいか

？」

彼女から手渡された袋の中には、ライ麦パンやテイクアウトの店で買った温かいシチューが入っており、空腹の彼の食欲をそそる。

それと、と彼女は一言言くと、胸ポケットから白い封筒を取り出し、彼の手に渡した。

「臨時ボーナスだ。さっき本部へ言ったら、お偉いさんに手柄を立てたシオンに渡してくれって言われてな。多分、その重さからして今日から一ヶ月ぐらいの食費には困らないぐらいはあるだろう」

ありがとうございます、と紫苑は一礼すると、バーニスはじゃあ、また何かあったら呼びなよ、と言ってドアを閉めた。

彼は部屋の中へ戻って荷物を置いて、本部の紋章が描かれた白い封筒の中身を開けると、そこには一万ペイトと書かれた紙幣が十枚と金貨が二十枚ほど入っていた。

(い、いや、これって一ヶ月分の食費どころじゃない金額じゃ……)

異世界に来てまだ数日しか経ってない紫苑でも、金貨と高額紙幣を見るかぎり、中に入っているお金は相当な金額だと予想できる。

中身を見て動揺しまい、すぐに彼は手元にあつた無線機でバーニスへ連絡を取った。

テレビを付けていたのか、バーニスの背後からは何らかの声が聞こえる。

「もしもし？」

「ああ、紫苑か。どうした？あ……私が買ってきたシチューが口に合わなかったか？」

「いえ、そうじゃないんです！さっき貰った白い封筒のことなんですけど……。これ、一ヶ月分の食費ぐらいの金額じゃなくて……。本当にこんなに貰ってもいいんですか？」

「ああ、貰えるもんは貰つとけ。本部から支給される臨時ボーナスってあんま無いことだからな。ああ、そうだ。臨時ボーナスの明細は白い封筒の中に入ってるからそれをよく見てみるといい」

彼の次の言葉を待たずに、じゃあな、と彼女は言つと無線を切つてしまった。

よく見ると確かに白い封筒の中にはもう一枚の紙が入っており、紫苑はそれを取り出して見てみる。

下には臨時ボーナスの証明となる、本部の幹部らしき者が書いたサインと特殊な判子が入っており、彼はそれをみてから明細を覗くと――。

（よ、四十万ペイト！？）

彼の世界の通貨の円に換算して計算しても四十万だ。

この歳でこんな大金を貰えるとは思わず、紫苑は生唾を飲むしかない。

（こんな大金、何処においておこう……）

迷った挙句、紫苑は引き出しの奥底に入れておくことにした。そして、冷静になるためにベランダに出て数分頭を冷やして、部屋に戻ると、テーブルの上に置いてあるパンとシチューを食べ始めたのだった――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7807v/>

もう一つの幻想世界

2011年11月21日10時06分発行